ひょうご現代詩集２０２２

自らを他者として見つめるまなざし

時里二郎（兵庫県現代詩協会会長）

『ひょうご現代詩集２０２２』は通巻第十六集となりました。

コロナ禍という未曽有な事態は、まだ終息したとは思えません。ウィズ・コロナという聞こえのよいフレーズで、手探りな日常が始まっていますが、なにをおいても日々のくらし、目先の経済というわけで、先に明るい見通しがあるわけではありません。それにくわえて、ロシアのウクライナ侵攻という事態が出来しました。

「昔あったものは、これからもあり、昔起こったことは、これからも起こる。日の下には新しいものは一つもない。「これを見よ。これは新しい」と言われるものがあっても、それは、私たちよりはるか先の時代に、すでにあったものだ。」

ウクライナの悲惨な状況が次々と伝えられたとき、この『旧約聖書』の「コヘレトの言葉」がふと口を突いて出てきました。東日本大震災の時もそうでした。コロナ禍が蔓延したときも、かつてのスペイン風邪が引き合いに出されましたが、このコヘレトの言葉のとおり。

ウクライナ情勢によって、一気に世界経済は行き詰まり、当然この国もそれに飲み込まれました。加えて円安の状況下、物価の高騰と、原材料やエネルギー不足の不安に怯えています。さらに年来の異常気象がもたらした台風の異変や、線状降水帯のような耳慣れない気象用語もすでに日常化してしまうほどの豪雨災害。

私たちの想像力が現実を追いかけていくような時代です。私たちは、さながら非日常化した日常をいつの

まにかあたりまえのこととして受けいれてしまっています。しかし、ふりかえってみれば、とりわけ二十世紀以降の世界は、カタストロフと呼ばれるような事態に次々と襲われてきました。コヘレトの言葉のように今に始まったことではないのです。第一次世界大戦から、スペイン風邪の世界的な流行、第二次世界大戦等など。朝鮮戦争やキューバ危機、湾岸戦争、ニューヨーク貿易センタービルの同時多発テロ。阪神淡路大震災と東日本大震災。チェルノブイリ原子力発電所事故、東京電力第一原子力発電所の惨事。そして新型コロナのパンデミック。

詩（言葉）に関わる者として、直截的にそういう状況を自らの言葉に引き込む必要はありません。しかし、今を生きる人間として、自分の立っている位置は見失うまい。それは戦前の詩人たちの犯してきたことを想起すれば当然のことです。

その愚を繰り返さないためにも、大切なのは、自らの立ち位置をたえず確かめること、疑うこと。言い換えれば、自らを他者として見つめるまなざしを持つこと。それは、詩を書くことにおいても基本的な姿勢のはずです。

そのために提案したいのは、ほかの多くの詩人たちの詩を読むこと。自分の詩（ことば）に凝り固まっているところからは、決して清新なポエジーは生まれません。自分にはない異質なものにも目をむけて、自らの言葉の糧にすることを考えてはどうでしょうか。

どんな詩でも、それが詩であることの条件は、そこに書き手の発見があることです。言葉（詩）を書くことによって、見えていなかったものが見えてきたり、隠れていた（隠されていた）ものが現れたりすることだと思います。詩を読む人もきっとその発見に心を動かされるに違いありません。自らを他者として見つめる眼差しを持つということはそういうことだと思います。このアンソロジーはそのための絶好のテクストです。

目次

詩を書く人間として　時里二郎　2
母の旅立ち　相野優子　8
わたしの隠れ家　青木左知子　10
ぼくのこと君にはどうみえるのか　朝倉裕子　12
月日　芦田はるみ　14
生きる　あだちかつとし　16
黄色い椅子　阿部由子　18
あとかたの光　安西佐有理　20
リズム・テンポよく　飯島小百合　22
五線譜を駆け降りる　いのうえあき　24
贈りもの＝病む人に＝　井上修子　26
だれも聞いていない　猪谷美知子　28
君／階段の途中から／五十年　今村欣史　30
野原とアナーキー　入江田吉仁　32
部屋のない窓　入間しゅか　34
秋へ／こんな日は　岩井八重美　36
ピアス　岩﨑風子　38
ことばの海　内田正美　40
人間暮色　梅村光明　42
普通電車　江口　節　44
今、大変、でも？　大石玉子　46
虹の彼方にきざす叙景　大西隆志　48
気化せぬ触手　大橋愛由等　50
ふるさと　小田涼子　52
秘密のレシピ　彼末れい子　54
神経質な線　和比古　56
おとめのいのり（抄）　神尾和寿　58
動く時間と止まった時間　亀井眞知子　60
稽古　河原真紀　62
マイルーム　神田さよ　64
備前香炉　北川清仁　66
市場へ　北野和博　68
My Blue Heaven　季村敏夫　70
ロカ岬　工藤恵美子　72
今朝の秋　黒住考子　74
インスタント上海　黒田ナオ　76
当時を振り返れば何ということもない　小杉ヨウ　78
アオ　ハル／秋日和／記憶　後藤益男　80
今日は「いい天気」か　佐伯圭子　82
造花／ふたり／カナリアの歌　佐土原夏江　84
眠れぬ夜の歌　真田ちほ　86
露草　坂本久刀　88
八月の空　里園美苗　90
羊の国のお話　在間洋子　92
おもいの道　紫野京子　94
雑草　柴田　実　96
捨てられた季節　関はるみ　98
水蜘蛛　高木敏克　100
鰯が通る道　高谷和幸　102
吊るされて　たかとう匡子　104
訃の月日　高橋夏男　106
詩の出来かた　高橋冨美子　108
わたしは「九条」です　たかはらおさむ　110
小さな家康　竹之内　稔　112

分配　武内健二郎　114
域に在り　田伏裕子　116
ぬしゃだれ？　玉井洋子　118
うたう　玉川侑香　120
上石寺井美備子／白井由名花子　月村　香　122
バラ公園のある町　辻岡真紀子　124
生きる　津田真理子　126
メモランダム　暮色　寺田　操　128
風の手摺り　時里二郎　130
天秤ばかり　長岡瑛美　132
invadars　中堂けいこ　134
道のべの木槿は馬に　永井ますみ　136
生きざま　中川道子　138
まさのおばあちゃんの畑／にび色　中島友子　140
東急目蒲線鵜の木駅　中嶋康雄　142
今夜の眠り　奈木　丈　144
開発に追われて　西海ゆう子　146
時が止まる　西村好子　148
おひとりさま食堂　野口幸雄　150
トンネルを越えて　信定和美　152
雀　野元　正　154
帰る家／エンドロール　橋本千秋　156
ヒイジイサン　八田光代　158
三日月の夕　馬場秀司　160
思い出　浜田多代子　162
あおいじかん／カーテンコール　原田ひでよ　164
水蛭子　hiruko　坂東里美　166
先はわかっている　福田さとる　168
咲きかも散ると　福田知子　170
祈り　福永祥子　172
井の中の蛙「道程」を想う　星ヶ崎ルミ　174
ローラー　牧田榮子　176
蝉／失望　増田まさみ　178
ソーシャルビオトープ　松下玲子　180
まあだだよ　丸田礼子　182
静かな夜　水こし町子　184
母のいる風景　室井正彰　186
放送部の狭い部室で　望月逸子　188
渋皮煮　森田美千代　190
秋　山口洋子　192
光を／秋の訪れ　山下輝代　194
残波　山下晴久　196
漂白　山中ゆきよし　198
戦場の子どもたち　山本眞弓　200
まがり角　山本彰子　202
言葉の海　横山美代子　204
愛すべきは誰か　凛　清太　206
生死の橋　渡辺信雄　208
会員の発行物／会員の発行詩誌　210
編集メモ　大橋愛由等　214

母の旅立ち

相野優子

母はおとといはベッドの上でうつらうつら
それでもひ孫たちの写真を見せると
かわいいねえと目を細めてくれたのでした
きょうは朝からもう目を閉じたまま
真白な顔で旅立ちに備えているようでした

もうお別れなんだね
いままでありがとうございます
と母に行っても返事がないので
窓を開けて空気を入れ替えながら
淡路島のてまえまで海の上を飛んでいる
アジサシたちに声をかけました

わたしの母が今夜から一緒に飛ぶから
よろしくね
病気になってからもわたしを守ってくれた

母が自由になってそちらに飛んでいくから
いっしょに海で遊ぶ仲間に入れてねと
幼稚園で友だちがいない私の為に
母が言ってくれたようにいってみました

そして深呼吸して
わたしは世界の果てになりました

わたしの隠れ家

青木左知子

マスクてふ口当て布の裾　押し上げて
物　食したるとは
いづれの時代（とき）の習ひならむ
げに卦体なさまなりしが
さることありしと
古き文書に記されてあり
悪疫を抑ふる故ときこゆ

それってさあ
生命活動もたない
アホみたいに簡単な微生物の一種
なんやて
人工知能や人造人間たらいうて
途方もないもん造り出し
これ　操って当然みたいな顔しとるお偉い人間さんが
いま　どでかい球体のそこらじゅうで

その新型コロナたらいうもんに
オロオロ
おたおた
してるんやて

（なあんて　ね）
お頭のなかはステキなところ
どんなことでもおもってしまえるんだ
だからわたしは
時間逆流させて
二十一世紀のありさまを
清ノ少納言主宰の同人誌に投稿したり
宇宙船にも乗らないで
かぐや姫さまのマンションのドアをノックしたりしてさ

（でもね
怖い世界が入ってくる掘っ立て小屋の隙間だけは塞ぐこと
できないの）

ぼくのこと君にはどうみえるのか

朝倉裕子

川端の道を歩いていると
後ろからゆっくりと自転車が追い越していった
薄ピンクのTシャツに黒いキャップ帽
背中の襟首あたり
　HOW DO I LOOK?
小さな文字を背負っている

昔　若いフォーク歌手が歌っていた（＊）
　ぼくのこと君にはどうみえるのか
　今夜泊まるところもないんだと思うのか
　腹が減って死にそうなんだと思うのか
　淋しくって気が狂いそうなんだと思うのか

猫背のおじさん
子どもからみればおじいさん
急ぎの用にはみえない

いつもの喫茶店の遅いモーニングサービスを食べに行くのか
図書館の雑誌コーナーへ行くのか
その先のショッピングセンターのソファで本でも読むのか
賢い奥さんに夕方まで帰らないように言われているのか
夕方には洗濯物を取り入れるように言われているのか
それとも小犬の散歩
自転車はゆったりと先をゆく
なれた様子は
明日も自転車に乗っているのだろう
柳がゆれる
梅雨の晴れ間に風が吹き抜けて
なんだかしあわせそう

HOW DO I LOOK?
Tシャツは誰が買ったのだろう

（＊）友部正人作詞作曲「ぼくのこと君にはどうみえるのか」から

月日

芦田はるみ

嘗ては通い慣れた道だった
真っ直ぐに行くとあの子の住んでいたマンションがみえる
あの子の名前は思い出せないが二階が住まいだと言っていた
ここを右に曲がって縦筋をいけば
左手に美容室
その隣に医院
それから
あれ　見知らぬ店いつから開いたのだろう
足早に通り抜け駅に着く

電車はすぐにやって来た
ためらいもなく乗り込む
コロナが少しおちついたせいか
どの席にも人が座っていて
立っている人も何人もいた
並んで吊革に手をかけて

窓の外に目をやる
目の端には座っている野球帽の少年が映る
うつむいたその少年は床に置いた鞄の中でしきりに捜し物をしている
やっとみつかったのか顔をあげたとき
電車が大きく揺れて一緒に傾いた
瞬間
野球帽の下は深い皺の老人の顔

電車はスピードを緩めない
行き先表示を
確かめなかったことを後悔しはじめた私を乗せて
街から遠ざかり
さらに大きなカーブへとさしかかっていく

生きる

あだちかつとし

悔恨

必死に生きてきた
つもりだが
父も母も救えなかった

父は腸閉塞になり
寝たきりになった
母は気づいた時は
末期の癌であった

もっと優しくできなかったか
手を握ってやれなかったか
悔恨は消えない

余生

人は食べなくては生きていけない
めざしをあてにして酒を飲む

ぼくは何人も友を亡くした
これからは余生
生かされているとしか思えない

本当によく生きてきたものだ
戦争がなくてよかった
脳も心臓も
胃腸も頑張ってくれた
ありがたいことだ

生きる

生きていると
親を見送らなくてはならない
子どもを育てなくてはならない

仕事をしなくてはならない
家事もある　地域の仕事もある

体を守るため休息をとる
過重な労働は避ける

諦めることもある
妥協すると自分を失う
ぎりぎりのところで生きる
後はあるがまま

自然

桜が咲く
人はしばしの時間を楽しむ
桜はすぐに散ってしまう
死について考える
人の命もはかない

夏　なんという暑さだ
思考が進まない
これから地球はどうなるのか

白菊が咲く
木々は紅葉し　やがて散っていく

雪が降る　田畑も屋根も白くなる
ぼくはひたすら春を待つ

黄色い椅子

阿部由子

ある日
逆流する時間のなかで
少女の昏い胸のうちに浮かび上がる
空っぽの部屋に
黄色い椅子が持ち込まれる

少女がコーヒーを飲むむこうがわで
数え切れないほど多く
並べられた椅子たちが物語る

さよならを言いに来たの
そのためだけに会いに来たの
昨日までことあるごとに諍いあって
わたしたちは　いま
窓辺から斜めに差し込む朝の陽を背に
密やかに佇んでいる

終わることない時の刻みに寄り添い
椅子のひとつひとつに名をつけて
心の空洞に端正に並べようとしてみた

目を凝らすと
少女の頬に血がうっすらと滲み
微かに漏れる祈りの言葉が揺れて
もう椅子たちは片隅に積み上げられて
無色化する

あとかたの光

安西佐有理

斑入りの緑を帯びた庭の光が薄明るく照らす
籐の寝椅子の編み目は思い浮かぶが
そこでくつろぐ人のすがたは
記憶の家に溶けこんで
自由に呼び起こせなくなっていた

わたしたちの家族は八人だったけれど
この居間には四人の夕餉を待つ空の茶碗と皿が
ひたすら行儀よく並んでいる

玄関にいた雉の剥製は
いつのまに海を渡ったのか
島の廃屋の棚の上でも戸口に眼を光らせていた

わたしが寝起きしていた二階の部屋は
明け方のまどろみでは、実在しない天窓を備え

いくつも連なる未知の朝に開けていたのが
今では後に暮らしたあちこちの家の二階と
通じているらしい

ときおり破れ障子の向こうに灯りがつく
チューニングノイズもなく夕方の柝の音が響く

家に住むものが、いつまでもこちらを見ている

リズム・テンポよく

飯島小百合

とは、いえ
そのようにいかないのが人生

そう、ならないから
あきらめたくなる

最後まで
何が起こるかわからない

と、思い、生きていたら
「希望」が側についていた

「主人が生還、
家に帰ってこれたの。
心配してくれてありがとう」と
友人からの電話

一瞬一瞬
テレビのチャンネル捻るみたいに
場面は変わる

先行き不透明
予測不能

確かなる鼓動と共に
リズムを刻みテンポよく
生きてゆきたい

五線譜を駆け降りる

いのうえあき

朝からの不規則な風の音
痛みが増しているので
遮光カーテンを引くと
ガラス表面のざわめきや温度が遠のく

走りだした耳の奥
大西順子カルテットのFragile

微笑みうかべ撫でているジャズピアノ
確かな足取りのコントラバスが
ひくく　波動を広げる
軽やかなリズムで
次第に速度をあげると
あいまいな記憶と記憶のはざまに
うずくまるわたしのくらがり
揺さぶられ　重なって響きだす

葉脈状につながって浮きあがったり
時に　破れたり
濁りを帯びてくる音色
ジャズのメロディは
疾走するように
わたしの棲み処のなか
見知らぬ扉を次々と開き
侵入する
ひらかれていく部屋を見まわすと
景色の中心部は逆光になり
そこにいる人の貌は
濃い翳に隠れてみえない
煮凝り状に　不協和音のうごき

うねりを抜け出すとメロディは

グルーヴィなリフインで一巡している
着陸を図っている気配

終われない　わたしのアドリブ演奏　今受け取る
合図　余白に刻まれた耳ざわりな振動音を手掛か
りにして　記憶の底の　見えてこない沈黙の澱み
に　両手を差し入れる　手のひらに残った不明な
かたちをおとへと　切れたり　接続したり　白と
黒の鍵盤を左右に激しく移動　いろんな色彩が飛
び交って　揺れる　引っ掻き続ける　休符記号が
ばらばらと零れ落ちて　破線になっていく五線譜
を　わたしは息せききって垂直に駆け降りていく

贈りもの　＝病む人に＝

井上修子

蕾ばかりの花束を
あなたに贈りたいのです

白い花がひらいたら
淡い光が　やわらかく
あなたに　朝をとどけます

青い花がひらいたら
雲ひとつない青空に
あなたは　旅の夢をみる

赤い花がひらいたら
心許して日ぐれまで
あなたは　友と語り合う

蕾がみんなひらいたら
あなたは　きっと歩き出す
白いベッドに手をふって
花いっぱいの部屋を出る
それから　風に向かって
まっすぐに　歩きはじめる

だれも聞いていない

猪谷美知子

春
閉め切っていた山小屋を開ける
生きものたちの散乱のあと

小屋には
しっぽだけ残して姿の見えないもの
山には
あごの骨だけ残している鹿
散らばった羽
負け戦の残骸
降参という白旗を上げられないものたち

凍える冬の山
勝ったものだけに
やさしい春の陽
物置小屋の屋根の小さな穴から差す陽

一回こっきりは
長かったか短かったか
来なかっためぐる季節

せせらぎが流れ
緑が萌え
生き延びたものたちの
愛の交換がはじまる
蛇は草むらで睦み絡まりあう
冷ややかな鋭い目が潤む
オタマジャクシは泳ぎ
鳥たちは卵を温める

途切れたものたちの声が
雲間から
だれも聞いていない

君

今さら　お前のことを
「君」だなんて呼べはしない
けど　一度試してみようか

今朝ぼくが目覚めたときにはもう
君は寝室から姿を消している
リビングに降りると
そこにも君はいない
ヒーターが生き物のような音を立てていて
部屋は温まっていて
ぼくの着替えが揃えて置いてある
顔を洗って血圧を計って着替えて
少なくなってきた髪を整えて
厨房に入る
そこにも君はいなくて
隣のお地蔵さんにお参りしている

今村欣史

掃除をして花の水を替えて
孫たちの幸せを願ってから
帰ってくる
「ただいま」と言って
ぼくは「おかえり」と応じて
それが今日初めて
君と交わす言葉
その間にぼくは
湯を点ててコーヒーの準備をする
君はトーストを用意して
リンゴの皮を千切れないようにむいて
ぼくの前に出してくれる
ああ　そうして君は
今日も一日を明るく照らして過ごす。

階段の途中から

遠い昔
寝床に向かう二人の子どもたちは
階段の途中から
赤いほっぺでこう言った
「早く寝にきてね」
「電気消さんといてね」

二人暮らしの今
階段の途中からわたしが
「早く寝にきてね」と言う
恒子は「はいはい」と答えている
合わせて一五二歳の二人である。

五十年

いつもわたしが先にやすむ
朝起きるのは後からだ
こうして
恒子の寝顔を見ること少なく
五十年間過ごしてきたが
このごろわたしは
夜中に小便に起きることが増えた
小さな灯りの中で
見るとはなく
恒子の寝顔を
かなたのものを見るように
透かして見ていることがある
脳が覚めていないからか
それとも暗いからか
五十年の見境がつかない
あれはいったいどのあたりだったのだろう。

詩集『恒子抄』より

野原とアナーキー

入江田吉仁

野原のことは　なぜか先に知っていた
私はうさぎだったのかもしれない
ことばだけで野原は創作された

野原はなかった
畑とたんぼだけだった
牛のえさは　あぜ道で刈った

都会に野原はあった
団地造成で山間（やまあい）の土地が平たんにならされた
団地の端の工区は、平地で広がりがあって　草が存分に生えている
道路はあるが舗装がまだで　車も通らない
草の丈は1メートルあった
これが初めて見る野原だった
草は実を結びまた次の世代が育つ
フェンスで　囲ってあった

所有者は或る事業者で　看板が立っていた
創作した野原には　こういうのはなかった
ひばりが鳴いていた

団地の中　中央公園では　桜が咲く
それが終わると草が勝手に生え
シロツメグサのころは歩いたり駆けたり
ハルジオンが膝を越える丈になって
野原と思って踏み歩く住民もいる
トラクターで1～2日かけて除草する

下のたんぼ地帯で
耕作しなくて
稲株の跡のある乾いたたんぼに
粘土を好きな雑草が茂っている
子どものように　子どものときのように
入っていいという気は起らない
持ち主は年に何回か除草している
赤字だと思う
雉とむくどりとすずめが
近づくと飛び立つ

部屋のない窓

入間しゅか

部屋のない窓が言う
「雨宿りさせてください
雨は墜落から始まります
では、
影は身体の一部でしょうか？
身体は心の一部でしょうか？
けれど、
涙は流れないと
涙になれないなんて
かわいそう」

近頃は
部屋のない窓が
切り取った景色の
所有権を巡る
争いが絶えない

雨の日は尚のこと
窓外で
傘がいっせいに開く
その一瞬を見たいが為に
人生を棒に振った人が
いたとかいないとか

雨粒が窓をたたく
部屋のない窓が言う
「寄りかからないで
悲しみを引き受けてしまうから
頬杖をついて
ただ黙っていてください」
雨の墜落を
窓だけが見届ける
部屋のない窓の涙を
だれひとりとして
気に留めることなく
窓外で
いっせいに傘が開いた

秋へ

岩井八重美

差し込んできた日差しに
思わず後ずさりをする
なんの後ろめたさかと
ほとばしる水の冷たさに
きゅっと心を絞って
日射しへ踏み出せば
木せいの匂う
扉が開く

こんな日は

光に縁どられた池は
まぶしい球体となり
浮いているようだ
木から離れた葉は
翻りきらめきながら
音もなく着水する
梢はゆるやかに揺れ
鳥の声は遠くに伸びる

世界は明るく
わかりやすいと
信じているふりを
たやすくできそう

ピアス

岩﨑風子

また一本の火箭が射られた
青いあおい空に
その声は
ながく尾を曳き牛舎におちていった
形を変える一つの生のこと
未然なできごとのように
手際よく切りはなして　炷(い)く

人工授精でうまれて二年と四ケ月
われら両の耳に黄色いピアス
牛かいの手さばきはなめらかに
今朝はていねいにブラシをかけられた
前足はまっすぐ立って
目はじっと正面
首を右に振り
左を向こうとして震えるようにひと声啼いた

おもわず啼いた――――
どこか　さまようような声だったかもしれない
あたりの空すらも
吸いあげてしまうような
だけど、
啼いたのはそれきり
それから促されて板張りのトラックに乗せられた

われらがのし歩くだけで
神さまのように扱われる国もあるそうな
あたらしい領土へはおよばぬとしても
何やらやたらさびしくて
重い袋はどこへはこぼう

わかっているよ

われらつながれた極(はて)の
手渡される引き際の
はりさけるような沈黙にある
ゆるがぬ冬の彗星
われらのピアスは
硬い引金をつき抜けて
捕らわれのない川に送り返される
なんでもない日々として
なんでもなく
人々の食卓に

ことばの海

内田正美

世界が欠伸して
次におおきなくしゃみしたとき
アが黒板から滑り墜ちて　見えなくなった
イもページからするりと抜けて
くるくる回りながら光のすき間に消えた
ウもエもオの文字も
バラパラと棚の書物の端から逃げた
偶然にうすれ始めた字がひとつの字に
意味を持とうとささやいたけれど
声に出されるのはイヤだと離れていった
文字は順番にうすれてよごれて
滲んで読めなくなって
端から真空のなかで壊れて消えた

世界が眠るあいだに
文字は
消えた先から　また泡のように生まれて

棚の上に積みあがる
ぼくは捜そうとする
文字のなかのことばのうらの
せつないもの　生まれようとするものを
厚い本のひとつの物語
薄い詩集の開かれたページの
ぼくの時間　誰かの時間
あっと言う間に
若さも艶めいた色彩も剥がれおちて
行方知れずの男や女
死者たちの声も消えた

いつの間にか海がひろがり
世界は偽りのことばの満ちる海
よせてはかえす波の音
浜辺で文字を拾う
汗に汚れたFoolな男　無骨な指で触れた
残渣
沈んでいたイの文字や
横向いたヲの文字を
ちいさく声に出して

人間暮色

梅村　光明

三人姉妹

三人の女性が昭和の初めに生れた石牟礼道子一九二七年三月一一日向田邦子一九二九年一一月二八日久坂葉子一九三一年三月二七日と同じ小学校に通っていたなら四年生二年生一年生の間隔になり朝礼があれば同じ校庭に整列していただろうが三人三様の場所で生まれ育つ過程を経ても唯一の共通項である死が傍らにあった三人が交差することは無かった仮に三人姉妹と見立ててみれば長女である道子は一九歳で生まれつきの虚無感に捉えられ自殺未遂を起しその後も死にたがり続けたが二〇一八年九〇歳の長寿を得て余人をもって代えがたい多くの著作を残し惜しまれて逝くその三八年前の一九八〇年に次女の邦子は直木賞を受賞それ故に多忙を極め乳がん再発の恐れも有ってか売れっ子作家の宿命とも言える依頼された仕事は断らない状態に陥り一年後観光地訪問の紀行文などの企画旅行で訪れた台湾に於いて飛行機事故という本人にはとても受け入れる事の出来ない不慮の死を押しつけられるも四十年後の新型コロナ下にある二〇二一年五一歳のままの夭折作家として新しい読者を得て文庫本が売れ続けているが三女の葉子は鶴見俊輔からこのどこまでも増大する大きな自我を容れることの出来る世界は今は無いと評された二一歳は小説幾度目かの最期を書き上げた日一九五二年一二月三一日午後九時四五分頃阪急六甲駅ホームから三宮発大阪梅田行き特急電車に飛込み轢断されたトッパーとズボン姿で男の子と間違えられた遺体は今も新幹線新神戸駅の裏山にある川崎造船所の創立者曾祖父正蔵が寄進した菩提寺徳光禅院に運ばれ後に贋・久坂葉子伝を著す富士正晴も元日には駆けつけ葉子の血が滲む柩を前にして母親が本名の川崎澄子と言わず久坂葉子を拝んでと言ったことが印象に残るが拝むことを拒否一升瓶から湯呑に注がれた酒を黙って呷り続けるＶＩＫＩＮＧ船長の修羅

昭和のこども

神戸大空襲に遭い養父は行方不明となり同じ養子だった妹を疎開先の福井市で栄養失調で失いアウトローの暮しに行き詰まったところを新潟県副知事の職にある実の父親に引き取ってもらえた際には戦災孤児だったかどうか微妙なのは守口市に住む養母と養祖母の元に身を寄せて生き延びた十七歳の時だがやがて焼け跡派の直木賞作家となった野坂昭如が短編小説集のあとがきとして書き残したぼくはもの心ついて以降嘘ばかりついてきた子供のころは無邪気な嘘十四歳で焼け出され生きるための嘘が身についた糊口を過ごすようになって嘘と現実の別が無くなったという言葉の極限のところの二〇一五年一二月九日逝去戒名なんか要らないと拒否した八十五歳が遺した火垂るの墓は普遍的な小説と言えるが一九三七年生まれ七歳年下の自衛隊出身者で唯一の芥川賞作家野呂邦暢は田舎に居ついた疎開児童でなければ原子爆弾の閃光を見なければ郷里が爆心地に近くなければ私は書いていただろうかやはり書いていたと思うと自問自答を夕暮れの緑の光の中幾度も繰返し自己とは他者であると言ってのけたフランスの詩人を今なら理解できると綴るも野坂昭如の一九四五年は昭和二〇年六月五日と並ぶ野呂邦暢の八月九日の記憶に導かれた作家人生の中では長崎市はＮ市に置き換えられたまま被爆都市ナガサキを舞台にした小説解纜のときは一九八〇年五月七日心筋梗塞による四十二歳の突然死で未完となり自らの意思ではないだろうが戒名恭徳院祐心紹泰居士を与えられ僕はまずここで見ることから学んでゆくつもりだというマルテの手記の一節を自分に言い聞かせ郷里である諫早市に暮らしそして骨を埋めた

普通電車

江口　節

読みかけの本を持って
（本のないときも　やはり）
帰りは　普通電車がいい

ときどき
読み疲れた眼を　窓の外に向ける

大きな川を渡るとき
水鳥が見えた
ホシハジロ　オオバン――

双眼鏡を持って
あの川沿いを歩こうか
いつか

上りで見て　下りで見て

景色は　一つになっていく
読書は旅に似ている　と昔　読んだが

「一日」も旅に似ている
覚えているけど知らない土地
見ているのに見えない時

とばしたページを　もう一度めくる

どの駅にも　電車は停まる
どの道も　歩くにはよさそうだ
まだ歩いていなかった　あの曲がり角

同じページを　また読んでいる

「うまいめし屋があるんだ」と言ったな
今もあるだろうか
遠い川を渡った息子が
しばらく暮らした坂の街に

今、大変、でも？

大石玉子

今、大変　まだ大変
かなり　大変　でも？

でも、「大変」という文字は
「大きく変わる！」「大きく変える？」と
表現されています

とにかく　大変
とにかく　大きく変わって行くようです
何かが？　どこかが！
やっぱり　大変

大きく変わることは　大変
でも　小さく変えることは　かなり可能

小さく変えてみました

あのことを少しだけ
このことも　少しだけ

「少しは　変わった！」
「もう少し　変わって行った？」
そんなことを考えながら
わずか前向き　わずか積極的　そして
時々　空を見上げるような
日々を過していたのですが

あちら　こちら　コトコト　コトッと
ほんとうに
変わって行くのですね

虹の彼方にきざす叙景

大西隆志

冷たい小雨が降っていたこの地に
陽が差してきたのを合図にして
山裾から伸びあがるのは舞い上がる粒ですか
自転車のサドルに水滴は留まっている
銀杏の葉も水を抱えている
首に巻いていた草木染めのストールのように
空中に放たれるのは弱い視線の帰路
小さな水路にはかつてのような塵芥はないのだが
頼りなくポンプから汲み上げられた水が流れ
紙コップに水を入れタデを摘むのは
旅人を真似たぼくの習性なのか、人生の習慣なのか
日々を重ねるしかないのかもしれない
賀古の沙弥教信を訪ねようとした一遍に
ぼくは神戸と加古川の距離とひと夏の長い休みを重ねる
神戸の叔母の家で過ごした日々
竹中郁の散水電車とともに浮かび上がる

高架を走り去る阪急電車の響き
スパークする夕日が西方浄土を描いていた
加古川から神戸に差し出すものってなんだろう
逆かしら、活弁士で詩人の詩村映二こと織田さんの営為
姫路と加古川、そして神戸
ぼくは小学生から還暦過ぎた年までが
三位一体となっていることに気付いたよ
明石には悪いが淡路島の島影を目に焼き付けながら
海峡を過ぎて行く漁船や、フェリーには
運べる時間と運べない時間があった
長い距離と短い距離に嫉妬したのは誰だったか
右往左往しながら明治生まれの祖父は動いた
瀬戸内から日本海まで貨物用自転車で駆け
宮津の遊郭にも駆け上がった
日露の戦争で大陸に渡り、何もかもやる気を失いかけ
語ることが不器用な庶民は
庭の花の開花を知りながらも
遼東で亡くなった仲間を弔い、そして失った言葉を
胸に秘め、対外戦争の始まりを感じていたはず
勇ましい言葉には僕らは弱かった
水滴には気付かないで

気化せぬ触手

大橋愛由等

卵を割る
双柱の思念が
都市角(かど)の
それとこれの
薔薇園を横超しながら
超現実の
負荷を内包しつつ
ひとびとの笑顔と赤面を奪い
跋扈する
覆いのコトノハと
有無を言わせぬ
覆いのブランコによって
混濁された
文字群が
北北東に嬉々と
触手をのばし

燻製を余儀なくされた
愛と愛たちが
行き場をなくし
帰るべき部屋の鍵を
もたないそのものたちは
堅い鉄扉のまえで
不規則なかつ空虚な
旋回をつづけ
半泣きの夕まぐれに
バ行の吃音が止まらず
かなしみが固化していく
のに耐えられず
卵を割る
そのとき
神話が日々相殺されている
森を駆け抜けてきた

羊たちの
気息が
いっせいに気化して
語りはじめるありようは
あらたな民譚と
アンフォルメルな意思を
生み出すかのようでいて
そのざわめきの群れを
聞き出した風と石たちが
それぞれのコトノハで
記憶しはじめていることを
うっすらと気づいていた
哲学者と詩人たちが
ためらいの
薄ら笑いをうかべながら
「それとそれ」
「これとこれ」
と果てない談義を
なしている初冬の

その日もまた
夢の解体がとまらない
不在のままの
薔薇園のなかで
創出しながら亡滅する
コトノハたちが
所在なく
月陰にひそみながら
佇ちつくしていよう

ふるさと

小田涼子

テレビ画面にうつしだされる難民キャンプ
命を脅かされ　国を追われた人たちの暮らすテントがずらりと並ぶ
テントの中にひしめき合う大家族
その中に生まれたばかりの赤ちゃんがいた
あの子は私ではなかったか
一九四六年の旧陸軍師団の兵舎跡の一隅

空海誕生の四国の小さな門前町は　陸軍第十一師団の町でもあった
一九四五年敗戦後　この町に
台湾　満州　朝鮮半島からの引き揚げ者が大量になだれ込んできた
財産を没収され　引き揚げ船に乗り　命からがら祖国にたどり着いた彼らは
住処を求めて　縁もゆかりもないこの地にやってきたのだ
彼らの住処にあてがわれたのは　兵舎や馬小屋として使われた場所
壁一枚の仕切りをはさんで　何家族もがひしめき合った
彼らの住む旧師団跡の一角は
見知らぬ者の隣り合う　生活困窮者の住む町へ変貌した

ぐるりを小さな溝川に囲まれたこの一角の外には
昔から続くこの土地の人々の暮らしがあった
小高い山裾に広がる水田
水の張られた田植えの頃は　オニヤンマが群れ
畦道には春は蕗の薹　土筆　秋には彼岸花
村の北向き八幡の秋祭りには
白馬に乗った宮司が　町に下り獅子舞　神輿　祭り囃子
門前町は活気に満ちていた
しかし　外地から引き揚げの　よそ者の住む所に祭りはなかった

思春期になった子どもに　教師が声をかけた
「あなたの家は　あそこなの？」
あ・そ・こ
この言葉の響きに　子どもは蔑みを感じ取った
戦後この地に生まれた子どもには
ふるさとと呼べる所はここしかないのだった

あの難民テントのあかちゃんの
ふるさとは

秘密のレシピ

彼末れい子

３００年周期で大流行をくり返していたペスト
１６２８年のフランスのできごとである
多くの人がつぎつぎと感染していく中で
まったく感染もせず
毎日のように盗みをくり返す四人組泥棒がいた
彼らは　ついに捕らえられて
なぜ　お前たちはペストに罹らないのかと尋問された
減刑と引き換えに　彼らはすべてを打ち明けた
秘密の飲み物を作っている事を
飲むだけでなく　からだにも塗っているという
リンゴ酢と野菜をミックスした秘密のレシピ

このレシピは　やがて１７４８年に
フランスの公式薬局方codexに登録され
アップルサイダービネガーとしてよみがえった
リンゴの成分が自然発酵し

フルーツ・野菜・ハーブ・スパイスの
底力を引き出した濃厚なビネガーだ

わたしの秘密のレシピも　告白しておこう
《完熟梅の蜂蜜たらし》
梅の木から落ちた黄色い梅　一個
洗って　盃ほどの器に入れ
そこにスプーン一杯の蜂蜜を垂らす
電子レンジで十五秒ほど
シューという音がすると　できあがる
超美味なデザート
梅は　黄色い蜜の中に浮かんでいるので
スプーンですくって食べる
皮も種のまわりも余さずゆっくり食べる
電子レンジをさらに長くすると
種がはじけ　白い実の〈天神さん〉も食べられる
アミグダリンという抗癌成分を含むが
大量摂取は禁止されています！と
当局に目くじらを立てられるので
ここだけの　秘密のレシピ

神経質な線

和比古

山の姿を描くと
動画のように動いている
ストイックな白い雲が
青い空を背景にして
新たな表情をみせる

青い
どこまでも青い
透き通った空の青さで
天空一面
何故か青色一色

絵の両端に
太い紺色の線を
勢いよく引けば
見たこともない構図

これまで何とか歩んできた
人生の道とも感じられる
その生き方は
絵の線の太さであらわれたかも

おとめのいのり（抄）

神尾和寿

①

砂のお菓子を　焼きました
さらさらしていておいしいな

トラックに積んで　売りに出る
北の国では財を成し

南の国で決闘に敗れ
射貫かれた　わたくしの

お骨を　誰かが焼いている
さらさらしていてかなしいな

②

あの人形もこの人形も大嫌いと
ダダをこねる赤子は
ダダイストでは
ない
ノ
精神

③

ひとり
ふたりと
りんねしたぼくを

数え上げていって
羊はようやく眠くなってきた

④

胸をなでおろしたのも　束の間
新しい怪獣のお出ましだ

火を噴く
詐欺を企てる
服を着替えて
料理に取りかかる

ぼくは残さずに平らげないといけない
次の新幹線に間に合えば　よいのだが

⑤

白衣に身を固めて
一日に数十人ずつ
おとめの心の音を聴く
それが仕事だから

早口で三十年後の運命のことを知らせる
絶望させて
泣かせる

⑥

五本の指を用いて
穴を塞いでは
また空けて
笛を吹くのであった
思い起こせばこの夏はずっと
Kちゃんを喜ばすために笛を吹いていたのであった

動く時間と止まった時間

亀井眞知子

部屋の中に光が充満する
床に拡がる夜の屍
足裏に踏みつけて
止まった時間のねじを巻く
カーテンは朝風にゆらぎ
鳥の鳴き声に呼吸を整え
目覚まし時計を止める

クルクル回る洗濯機
表示される終了時刻
ビルの上をはるかに乗り越えた太陽
テレビボードに積もった塵
息苦しいほどの時間の自己主張

バス停の時刻表にも
時は刻まれ表示され

次の便まで　何分かを待つ
無言のスーパーマーケットのカート
飽食の罪を重ねる食材を積み
レジ前に書かれた足形に
足を併せて精算を待つ
野菜を切り刻み料理する
自分勝手な創作の思い出
時の流れの二点間
甘かったり　苦かったり

止まった時間に支配された夢
若い母を追いかける幼児
夜のカレンダーは
月の満ち欠けにも　お構いなしに
母の時間は止まり
淋しい声の鬼ごっこの終わりは
羽毛の中の鼓動

稽古

河原真紀

「鶏肉はぬるま湯で　よう洗うてね」
台所でふと師の声がよみがえる
稽古のあと師にふるまわれる夕餉
師は若きころ板前に弟子入りしたという
家業以外のことをつきつめたかったのと
自分も師匠を持ちたかったのだと
修行を終えて授かった包丁一式を
広げながら師はよくしゃべり
手際よく鶏肉をさばいていった
一芸は多芸に通ずる　チーズチキンカツ
同じようにできるかしらと
耳をすまして胸肉をひらく

それなのに　どうしたことか
畳の上でひとり稽古をしてみても
師の声は聞こえてこない

ああ　本当に教わりたかったのは
料理ではなく　舞の極意
目付へと　仕手柱へと
師の声を探すように　一心に謡い舞う
されど
何も聞こえぬまま
舞い終えて　扇を閉じ
ふと　思い出す師のことば

師は教えぬものなり
弟子は教えを乞うものなり

はっとして
心を無にして　扇を開く
さあ　もう一度
今度こそ　問うべきことが
ちゃんと　つかめますように
と
深く息を吸い込んだ

マイルーム

神田さよ

飲みかけの苦いコーヒー
テーブルの朝刊の騒がしい文字
白いレースのカーテンから生暖かい陽差し
玄関の扉が少し開いたような気配
ふと見ると　部屋の暗い片隅に見慣れないものが転がっている
えっ、ひとの形　どうしてここに
おそるおそる見ると
口は切り裂けている
皮膚は黒く腐りかけている
死体の臭いが漂ってわたしのシャツに沁み込んでゆく
マンションの一室に起こる怪奇な出来事
事故なのか　殺されたのか
犯罪者はだれか　だれがここに運んだのか
うるさいわけのわからない電波がラジオから流れている
みんなが殺したガガッ
みんなが殺すから

おれも殺した　ガガーァ
扉や窓はいつのまにか固くしまって
あいまいな
あいまいな
死

小鳥の鳴き声と
銃弾の音が
混合するいつもの朝
日常化した破壊の景色
黒々と焼き尽くされた町に粉雪が覆っていく
撃ち殺す恐怖の手は震えていたのか
狂った手は世界を狂わせて
知性を埋葬する
どろりと沁み込んだ流血
鉄分を含んだ血の臭い
殺戮の地から私の部屋に
死屍累々
じっと座り込み
存在が抱え込む　虚無の明日を迎える

備前香炉

北川清仁

龍を肩にしょって
三つ脚で踏んばっている

二代目一草さんが
指でひねり出して
窯の中で赫赫と燃えていた

いまやエウロバのような面構えで
一草さんが
亡くなったことなど
一向お構いなし
俺がここにいると言わんばかり
床の間におさまっている

粛々と
現存することを　ぼくと

分かち合っている　いま
もしかしたら　このことは
小さな奇跡とでも言うべきことであるかもしれないと
ふと思ったことであった

＊エウロバ　木星の衛星

市場へ

北野和博

母さん　覚えていますか
こんな風に
手をひかれて

市場への道は
風の道
線路を渡って
橋を渡って

市場に入ると
煮物のにおい
豆腐を買って
りんごを買って
はぐれないようしっかりと

母さん　覚えていますか

魚が並ぶその先は
売り子の声の
その先は

光が見える
出口かしら
もう　すこし
こんな風に
手をつないで

※安水捻和詩集「記憶の目印」中の詩「さかのさき」へオマージュを捧ぐ

My Blue Heaven

季村敏夫

もう　いい　もう　いいから
（いいからといって　いったいなにがいいのか）
放たれた息
息が　乗り移る
死者が　生者に　覆いかぶさる

そこで　もっとも美しく輝いていたとき
彼らは消滅する
もはや　もう　なにをも　おもい　だせなく
おもい　だしたく　なく
もっとも美しい夏の
夏にふさわしい　それが流儀だとうそぶく

もう　いい　もう
（いいからといって　いったい　なにが　いいのか）
これで　見納め

横たわる人の　髪を　切る
もはや／もう／な／に／を／も／／お／も／い／だ／せ／
お／も／／い／だ／し／た／く／な／／
いっさいを空の青に従わせる

＊これは阪神大震災の後の作品だが、九月に塩屋で開かれたギタリストの澤和幸さんとのコラボ（主宰、谷森駿）の最後に朗読した。第二部は鈴木創士さんとの対談だった。アルトーの場合は声から身体が現れるが、声と息を巡って問いが発せられた。プネウマで応えようとおもったがやめた。そのとき、海からの風を感じた。風のなかに、思考させるものがあったのだろうか。
　月明かり、虫が鳴き、ときおり潮の香りが鼻孔をかすめ、なんとなくこうなるだろうと想像していた通りの稀有な会でした、翌朝鈴木さんから伝えられた。創士さんとはこの日が初対面だった。

ロカ岬

工藤恵美子

ここに地果て海はじまる
――　ルイス・デ・カモインス
（地球が丸いのを知らなかった十六世紀）

庭の雑草の中に
旅で出会った
同じ草を見つけた

地の果てに
あこがれ
夫の定年を迎えた記念の旅
ポルトガル　ロカ岬

岬に立つ
洋々と広がる海
蒼い蒼い空

果てしない海
水平線はくっきりと

二人の足跡を記した
足元の雑草

ああ
地の果てに
あこがれ
ポルトガル　ロカ岬

今朝の秋

黒住考子

久しぶりに柔らかな陽が差してきて
朝の食卓から　色づき始めた木の葉のさざめきを眺めていた

ゆったりとことばが出てきて
ぽつりぽつりと行きかって
ふいに
私たちに秋という季節がやってきたのだと知った

ほとばしるというのではなかった
時に泡立つ堰を越えることもあったが
ゆっくり途切れずに流れてきた

ことばは詩に変わらなくてもいい
色づき始めた木の葉のきらめきと
あまねく光の差し込む窓
そして

単純なことばが行きかう
今朝の秋

インスタント上海

黒田ナオ

会社をさぼって
今日はどこ行くの
誰かに聞かれたら
答えてみたい
インスタント上海
偽ダイヤ煌めく翼ひろげて
幻の街を俯瞰する
背広姿のおじさんが
公園のベンチで
膝にのせた弁当箱を開けて
しみじみと卵焼きを噛みしめても
まだ十時十五分
インスタントな昼休みは
いつもと違う時間に
いつもと違う場所で弁当を食べる
ポケットの奥に突っ込んだ

古い切符は上海行で
尖ったような青空に
三角クラゲが泣いている
寂しいときにはズル休み
いつもと違う方向めざして
後ろへ後ろへ電車は走る
通勤定期を乗り越えて
煙のように間のびした
ぬるい時間を漂いながら
今日は一日休みます
熱が少しあるようですと
電話の時だけ咳き込んだら
漢方薬でもいかがですかと
猿の頭が踊り出す

当時を振り返れば何ということもない

小杉ヨウ

昨今若い男女二人の恋愛において
ハラスメントという怪奇現象の用語が
さかんに用いられている。
相手が何如に異様であるかが強調され、
呪縛から解放されたいと願う。
性的な雰囲気は一方では悪臭としか
思えないし、
ねちっこい執念深さは
社会的な怨念と受け取られてしまう。
理性の及ばない領域は御し難いので
全てあいまいにして誤魔化されてしまう。
こうなれば相手の異性は受け容れる余裕を
失ってしまうので、
諦めるしかない状態になったとしても
引くに引けない状態になってパニックになる。
ただ、ただ徒花を咲かせるのみ

相手を労わる気持ちは時の経過とともに薄れ、
次第に貶しめる気持ちの方が強くなり
相手を憎いと思うようにさえなる。
恋愛が成就するという経験をボクは知らない。
相思相愛がなかったわけではないが
恋愛感情に支配され、すっかり腑抜けになっ
てしまって意気地がなかった。
思えば仲介者を頼めばよかったのであるが、
当時としては恋愛に溺れてしまいたい欲求の
方が強かったというか、
恥ずかしくて
誰にも言えなかった。
本当に恋愛とは
滑稽なものであると
自分の恋愛において正直思った。
どうにもできない宿命かも知れないという
考えは老境にさしかかって
少しは変ったかも知れないが、
敢えてためしてみようかという気には
なかなかなれない。

アオ　ハル

一時間目と二時間目は　美術の時間
屋上から瀬戸内を描いた
広い世界は適当に描けばいい
見てもよく判らない世界は適当でいい
それは倫理の先生が教えてくれた教訓
『広い世界に確かな答えはいらない』
青春の言葉が　今の僕を容作る
アオというのは拡がりで
ハルというのは真っすぐに　と

間違いを犯しては訂正し
失敗を空に撒き散らす
教室では答えは見つからない
「間違っていないよ」
そう言ってくれるのは　君だけだよ
あの日の約束を今も守り続ける
そしてこれからも

後藤益男

無限の世界こそ
アオ　ハル

秋日和

舞い落ちる　赤や黄色の落ち葉
リスが探し物をしている
日差しはすべてのものに降り注ぐ

樹にもたれて本を読む
難しい言葉は捨て去り
幾つかの言葉だけを残し
ベンチにそっと置いておいた

遅れてきた君は　息を切らして
ベンチの本を開く

開いたページの言葉を払いのけ
真っ白になったページに
一つの言葉を置いた
君はコーヒーカップを一口飲んで　行ってしまう

秋の佇まいに
よちよち歩きの時間が
公園で迷子

レンガ色のコートに　茶色のスカート
弧を描いて
缶コーヒーが飛んでくる
ナイスキャッチに君は笑顔
リスはどんぐりを食べている

記憶

身体に刻まれた記憶
太古から続いてきた記憶
預かり知らぬＤＮＡが

私の身体を流れる
絶えず生ずる葛藤
無に潜り込もうとする心
消滅を望む肉体
それは誰が決めているのか

その仕草
その視線
私の嘘
私の正義

あたかも初めてのように
心から生まれ　口から発する言葉
それは誰の言葉なのか
私の言葉なのか

呼び起こされる記憶
眠り続ける記憶
受け継がれてゆく記憶があるのなら
それは　何処まで続くのだろう

今日は「いい天気」か

佐伯圭子

1

今日は「いい天気」と大詩人が書いていた　わたしも書いてみよう〈今日は天気がいい〉草や木が茂って　空には薄く雲が棚引いて七月七日　七夕を迎えた
　朝の天気予報では夕方から曇り　天の川現れず　織姫と彦星は会えない　一年に一度　来年には会えるきっと　いい天気だったら　空には薄く雲が棚引いて　草や木が茂って　けれど皆　マスクで顔を覆い　笑っている人もいれば泣いている人もいる　泣いている人の方が多い　マスクで顔を覆っても　海の向こうで起きている戦争の焦げ臭いにおいは　不織布では塞げない　武力は嫌いだ　腕は組むため抱くために使え　いい天気もつづかない　雷雲だ　追っかけられている夢　うまく動かない足で　ひたすら逃げて泣いて目覚めた朝　いい天気だったけれど　幼いころの傷痕　さみしさが　柘榴のように裂けて　積乱雲　湧き起こる　つづかない　いい天気　大詩人のいい天気はどうなったか　垣根のむこうを〈ちょこまか足を動かして歩いて〉行った犬は　何処へ行ったか　わからない未来　を生きる　わたし　わたしたち

2

今日は「天気がいい」夜までこの天気はもつかしら　空を眺める　中秋の名月
　見たいけれど　雲が棚引いていて　夜　歩いてみたら　月が半分見える　そのうち雲が流れ去り　金色の満月　すぐに見えなくなる　でももうそれほど悲しくない　見えなくなっても　黄泉の国に行ったとしても　ここで見ている
月は宇宙に浮かんで　寂しそう　家族が居てもひとり　けれどある日潮満ちず生まれなかったあなたが　不意にやってくる　一陣の風が立ち　見知らぬ青竹のような脚が　階段を駆けおり　真横に迫り　閉じかけたドアに向かって走るとき　洗ったばかりの髪が　高く巻き上げられる　ぶつかってきたあなたの胸板の際で　逆立つ　風にまかれ　のび上がる　はるかな風舞い　舞い降りて
　頬に張りつく　濡れ髪の記憶　行ってしまった　弟あなたが　風まとっていっしんに　駆けてくる　満月のしたを

※「」〈〉は谷川俊太郎の詩「いい天気」より

造花

本物としか見えない
シャクヤクの花
白とピンクの
清楚で甘やかな気配

咲きつづけるしかない造花
枯れることを知らない悲しみを思う
せめて眠りの時間をあげよう
部屋の灯りを消す

ふたり

旅に出て乗り物にゆられ
話が途切れない

佐土原夏江

海が好きなあなた
空が好きなわたし

海の色は空の色
いままでわたしは何を見ていたんだろう
空の色は海の色
いままであなたは何を見ていたんだろう

カナリアの歌

母と私は似ていないが
娘はどことなく
母に似てきた

さいきん
母の好きだったカナリアの歌を
知らず知らず口ずさんでいる私

先日やってきた娘が
孫に添い寝をしながら
カナリアの歌を口ずさんでいた

約束ごとのように
それぞれの胸の中に棲んで
歌う小鳥がいる

眠れぬ夜の歌

真田ちほ

自分の足で歩く
自分の手で食べる
自分の頭で考える

この三拍子で
息が止まるまで
命をいきていく

空気を一杯吸って
水を一杯飲んで
暑さ寒さを凌いでいく

暑かろうと
寒かろうと
十重二十重に生き長らえること

元気一杯、花を賞で
食べて寝て着て、そして
大らかに楽しく歌って動くこと

いつまでも
どこまでも
火花は散っている

宇宙の一コマに
見知らぬ星々の歌は
あふれに　あふれ

人の命の息は
全宇宙の果てまで
波打っている

この世に死んでも
宇宙のあそこにも
ここにもと

星々はたゆみなく
人々を招いている
どうぞこちらへと

まさに神様の招き
人が生きて　死んでも
神様はいつまでも

人々を見守り
共に生きて喜んで
下さっている

露草

坂本久刀

立秋を
待たずに咲き始め
晩秋まで咲き次ぐ
一日花
朝日を帯びた姿で
光っている
昨夜突然
友人
「逝く」の電話
もはや語る術なし
心は重い
小さな花にも露が宿り
遅れ先立って
消えてゆく
句読点なき老いの日々
澄み切る空は

花の色
小さき命の揺れに
安らぎを
微笑の応援
朝がいい

八月の空

里園美苗

・
・
赤紙は男の所へ突然来た
男は19才だった
農作業しか知らぬ男だった
男は軍隊に入ると
船に乗って満州へ渡り
満州から隊列を組んで
徒歩でミャンマーまで行進した
飢えた時は森の果実や草を食らい
喉の渇きはよどんだ川の水でまぎらわせた
軍隊は鬼のように厳しく
男は何度も殴られた
優しかった男は
病弱な仲間のぶんまで
代わりに殴られてやった
実戦では
がたいの大きな金髪の男たちや

見た事もない肌の黒い男たちと
無惨な撃ち合いをした
銃弾が無くなると
銃をナイフに変えて戦った
一体何の為に殺しあいをする？
悩み抜いた時戦争が終わった
男は戦争で逝った仲間の
腕を切り落として
日本で待つ家族へと
届けてやった

日本に帰った男は結婚した
男は暖かい家庭を持った
そして父となった
父は私の頭をそっとさすって
戦争は絶対に良くないと
じっと目を見据えて言った
そんな父の思いを
私は引き継いで生きてゆく
父のあの目をきっと忘れない
八月の空と共に

羊の国のお話

在間洋子

いらっしゃい　ちょっと待っててねお茶を淹れるわ
——あら　可愛い羊
うん　ニュージーランドに旅行した時の記念なの
あの国では羊は一年中牧草地に放たれているのよ
——まあ　長閑ねえ　その羊に生まれてくればよかった
そうねえ　バスの窓からは緑の草原が広がっていて
羊たちが思い思いに草を食んでいたわ

ガイドさんが羊たちの寿命について話してくれたの
メスで五、六年　オスで十か月から一年
子を産まないオスはラム肉用に
メスも年を取りすぎないうちに処分される
牧草を無駄にしないために
もっともオスも種付け用に最小限残されるのよ
——その幸運なオスはどのようにして選ぶの
とりわけ女好きなのがいるんだって　メスを追っかけている

でもそれもすこしでも衰えてくると
——衰えるって　どうしてわかるんだろう
オスのおなかにチョークを塗っておいて
メスについている色で判断するって

——羊は逃げていかないの
臆病で群れを離れないらしいよ
——なんか　似てるね

似てるね　なんか
いまも羊たちは　青い空と白い雲の下で
美味しそうに草を食んでいるでしょうね
わたしの寿命は　なんて悩んだりしないで
若いオスに追っかけられたりしながら
その縫いぐるみのようにあどけない黒い瞳をして

可愛いよね　その羊
空港の売店で買ったの

おもいの道

紫野京子

はるか空にまで昇ってゆく
ひとすじの細い細い道がある
それは私たちの祖先の頃から
受け継がれている　ひとつのかたち

ひとがひとを思うとき
密かにつながる思いの道が生まれる
そのひとのために思うことは
そのひとが幸くあれと願うこと
それは果てしない祈りの道だ

かすかな衣擦れの音がして
見えない天使が舞いおりる
楽の調べが響くとき
その羽音が聞こえるかもしれない

いつか互いに見つめあって
微笑み合うことが出来るかもしれない
そう願うことは
未来に向かって手を差し出すこと

夢のなかで出会ったひとが
いつか現実の世界に現れ
幻ではなく　眼前に立って
あなたの名を呼ぶ
独りではなく
二人称の世界がそこから始まる

雑草

柴田　実

彼女は黙々と
庭の雑草を引き続けた
カタバミ
スベリヒユ
雑草の名を
呼びながら
オヒシバ
カヤツリグサ
名を知らない雑草は
植物大図鑑を引いて
たちどころに憶えた
ヒメジョオン
スズメノカタビラ
呼び続けながら
その生命力に苛立った
今日中に引いてやる

オオバコ
ギョウギシバ
引くうちに
雑草に愛らしさがあった
ハマスゲ
ホトケノザ
ある日
庭に
ドクダミの白い花が
咲いていた

捨てられた季節

関はるみ

錦の帯が
谷の屈曲に沿うて
上流にまで連なる
精一杯の競演
一枚のもみじ葉が
淵に漂っていつとはなしに流れ去る
もみじは凋落を肯定する
冬も間近　似た者同士よ

あの人はいまごろ
林の奥の小さな日だまりで
ブランコを漕いでいるだろう
数多の思い出を載せて
ほら
黄葉は翻弄されて遠くへと
人の心に秋の初風

忘れ捨てられた
告げ顔の軒端の萩
世捨て人と並んで

舌の上で震えることば
通じあえないもどかしさ
声にならないことば
吐き出せば形となり
時の重さを計りながら
ことばのあれこれ
貝殻で海を量っている

心のどこかで
雁の使いを待っている
哀しくはないか
秋の終わりは
そんな気持ちにさせる
八重の木槿が咲いて一日が暮れる
もみじは凋落を肯定する

水蜘蛛

高木敏克

わたしが生まれた谷は東にひらけ
銀色の湾が太陽をはねかえしていた
城は遠く時間のかなたにあり
水脈の水時計が時をおとして
城はもうもどらない

水に沈み土に沈み
何よりも時間に沈み
村は無実の街に沈み
時の城は無名のまま
わたしはもうもどれない

村の男女は樹液でむすばれ
闇の根の谷間から生まれたが
時の長田制度からあふれだし
林の中の田と溜池の猫族となり
林田村の惣谷を栖とした

蜘蛛の巣におおわれた
山上には大きな山蜘蛛がおり
闇をため地下水脈に流れ
水蜘蛛に変幻して
質量の闇の中をさまよった

野良仕事をしながら
猫族が上へ上へと移動して
蜘蛛を食べるものだから
無名有実の水駅から水蜘蛛は
水脈調査員として地上に現れた

夜になると
道路にスパイダー光線を当てて
闇を覗く調査員がいる
わたしは追いかけて
肩をたたいてみた

あれ
その顔にはルビーの目が八つ
山の上の蜘蛛出版のKさん
Kさんでしょう
地下から出てきたのですね

やあ
水脈は砂防ダムや溜池の底も
時間の底もすりぬけて
海につながっているので
湊の構造を調査中です

鰯が通る道

高谷和幸

ある女優は足の大きさの自覚が足りないから椅子の脚にぶつけることが多く　その痛みの記憶は　神経束がヒトよりも多いイカの足指のようになって　痛感はまわりを瞬時に高気圧に変えてしまうらしく　その朝はからっと晴れて涼しくなったと　テレビに出ていた彼女がニュースの合間に話していた　鏡に写るもう一つの彼女

反デカルト的な美意識の朝が　痛みもなにもかも消去していくように訪れたのだとわたしは

勝手な想像をしていた　痛みは本当にあったのか　どれほどの痛みなのか　わからない　いつのまにか警策を食らった父親が　棘でいっぱいのサボテンのそばに座っていて　耳元で　本を読んで聞かせてくれないかという　今はここでミソサザイの服を着て　ホトトギスや鶯　目白がやってくるのをずっと待っていたが　悪いことに冷たい風が吹き出したからもう駄目だろう

わたしをヒトのことばで勇気づけてほしいというので　それならば何かしているかもしれないとテレビを点けると　大気の異常で大量発生した鰯が大通りを歩いているところだった

吊るされて

たかとう匡子

こうして師走の風に佇むまでには
曲がりくねった山頂への道をたどり
さらにその先端の
くずれつつあるものに触れ

からだの芯をやさしく揉みほぐしていると
斜めに傾いた南天の
実のたわわな房が
空の光にさえぎられているのに気づいた

渇きにあおられ
音たてて脱けるか
吊るし柿
渋の

仮面が剥がれ

しだいに黒い斑点模様がひろがり
これは人ごとではないと
感じてはいたが

楕円形はやがていびつな四角形となり
深い昏迷の底の水面に飛び立つ鳥のかすかな羽音
日常は
誤作動がいっぱい

いったいどこへ行こうとしているのか
もうあとはない
師走の風に吊るされて
声にも言葉にもにじみ出てきた疑問符を呑み込む

訃の月日

高橋夏男

1

年賀状が来なかった先輩
寒明けになって
サヨナラだけが人生だ　と前書きして
肺癌と肺気腫の合併症でステージ4とのこと
五人に一人が助かる数値だと書き添えてあった

2

初秋　別の友人の夫人からの封書一通
夫が誤嚥性肺炎で死去したと告げ
コロナ禍の折から月に一回の面会しかできず
無残無念の告別だった　と
そして　家族葬で済ませた　とも

3

秋が深まったころに女性から電話
父君の死去を伝え　詩誌を送ってもらってきたと礼を述べた
学長や名誉教授の肩書きを持つ熱心なクリスチャン
八木重吉や賀川豊彦を熱く語る寄稿をもらった
詩誌の送付名簿から大事な一人が消える

4

歳末押し詰まっての訃報は同年の親友
老衰だったのは　これがいいよとの遺言か
年明けた春の訃報は六歳下の仲間のリーダー
病んではいたが急逝だった
仲間たちの追悼文があつまってきた

井伏鱒二　花に嵐のたとえもあるぞ　さよならだけが人生だ

詩の出来かた

高橋富美子

深夜や早朝に言葉や情景が頭に浮かぶ。それらが表現につながらないことも多いし　書きとめた言葉が形になり色を帯びるまでの時間もさまざまである。いきなり道が開けることがある。ごく自然に。たいていの場合そのほうがうまくいく。あれこれ言葉をいじりまわして仕立てあげた詩はどうも気に入らない。

生家の天井にはたくさんの節穴があった。戦後間もない幼児期　夜空を飛ぶ飛行機の爆音によく眠りを妨げられた。兄や弟の寝息を聞きながら　おそるおそる暗闇に目をこらせば　雨戸のすき間から漏れる月あかりに節穴が目に見え口に見えてきて　おそろしい魔物が浮かびあがる。きつく目を瞑り　布団を被り息を殺して眠れぬ夜を過ごした。

マンションの天井はクロス張りでむろんのこと節穴などないが　どこからやってきたのか一匹の蛇が棲みついている。夜も更けると無色透明の身体が巨大なナメクジのようにぬらぬらと波打ちながら移動をはじめる。しなやかにのたうつ肢体がすこしづつ色を帯び　やがて美

しい縞模様になって　まどろむわたしの夜具の間から滑りこんでくる。するすると身体に巻きつきやさしく締めつける。そのゆるやかな動きは隣室に眠る夫や若い恋人との時間を呼びさまし　とうに消えうせたはずの感覚を甦らせる。

空が明るむ頃　色褪せた蛇は床をぬけだし天井に溶けこんでゆく。朝の光を浴びた天井はなにごともなく白一色である。

自然に流れていく言葉のなかにちいさくひっかかるものがある　そんな詩が好きだ。躓きというほどではなくたちどまって反芻したくなるような。そこに作者の思想がみえるときは新しい発見をしたような気になる。毎晩のように天井に蛇が姿をあらわすことと　詩の出来かたは無縁のようでどこか関連があるのかもしれない。

わたしは「九条」です

たかはらおさむ

第九条　日本国民は、正義と秩序を基調とする国際
平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力
による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する
手段としては、永久にこれを放棄する。
②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力
は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認め
ない。

子や孫を　夫や恋人を
殺し殺される戦場に送ってもいいのですか

美しい国土が
空爆で戦火に包まれてもいいのですか

若者や自衛隊員を
米軍の〈弾除け〉にしてもいいのですか

「戦争の放棄」を誓ったこの国が
再び〈戦争する国〉になってもいいのですか

あの戦争で奪われたいのちは
みんな〈生きたかった〉とは思いませんか

戦争で起きた恐ろしい悲しい出来ごとを
繰り返したくないとは思いませんか

これからも日本の国が
〈戦争しない国〉でありたいとは思いませんか

わたしは　九条です
九条は　国是です
九条は　国際公約です
日本の宝です
世界の財産です
戦争犠牲者の遺言です

小さな家康

竹之内　稔

夏　教科書から出てきた　小さな家康をリビングで飼うことにした

みゃー　みゃーと家康が鳴いたから「どうしたの」と聞いた。でもやっぱりみゅーとしか喋れない。「三河弁が恋しいの？」と聞くとこくりと頷く。「おみゃは　そんなこと　気にするにゃ」と言うと元気になった。折り紙で専用のお城を作ると　中で丸まって寝た。喋れなくても文字は読めるようで、一緒に日本史を勉強した。

学校へ行っている間　ＴＶを毎日見せた。すると日本語を喋り出した。／江戸へ行きたい　トーキョー・オリンピックって何？／とか言う。「大きくなったらね」と普段言われていることを　あたしは言った。次の日　家康はマジックで口に髭を描いて　／おいは　もう大人でごわすにゃ／と生意気を言う。デコピンしてやると　三角形の両耳をぴくぴくさせて、みゅーと小さく鳴いた。

ある日　ＴＶでみんながしているマスクを指差し家康が怒っている。／付け方が違う。白天冠はおでこにつけるのが作法だ／と主張する。ネットで調べると

死者がつける白い三角形の布のことだと判る。接種時間を守らないお年寄りたちが列を作っているとの報道だった。／三途の川へ行くのか。六文銭がいっぱい要るぞ／と睨んだ。そのまま部屋の隅っこに駆けて行く。／六文銭は嫌いにゃ／と丸まった。

夕方　帰宅すると　アーモンド型の両眼いっぱいに涙を浮かべて　まだ拗ねている。頭を撫でてやると　／おいも　いっしょに学校へ行きたいにゃ／と　いつまでもしつこく鳴き続けた。仕方なく〈犬のお巡りさん〉を歌ってやると　いつの間にか寝てしまった。

家康は　人より五倍速く歳をとり　十五年生きて　死んだ

ほとんどをリビングで過ごしたから　江戸には行けなかった

分配

武内健二郎

あの日
僕たちは
日曜学校のキャンプで
海沿いの教会に来ていた

泳いだ後
食堂に集合した

木靴を履いたベルギー人の神父が言った
おいしいジュースを作りましょう

あふれるほどの水が入った
大きなヤカンに
二袋しかない粉末ジュースを溶かしこみ
割り箸でかきまぜた

そして
テーブルに並べられた
十数個の湯飲みに
その液体を
注いでいった

さあ　ジュースができました
たどたどしい日本語で
神父は宣言した

僕はひとくち
口にふくんだ

甘さへたどり着けない
かすかにオレンジの香りを放つ液体を
しばらく口のなかにとどめた後

ゆっくり飲み下した

それはジュースではなく
水でもなかった

キリストがパンを増やしたような
奇跡を起こしたわけではない

足らぬものを等しく
神父は僕たちに分配したのだった

あの日のことを思い出す時
僕はなぜか
オレンジジュースの甘さと香りに
満たされる

雨が降り始め
神父が言った
さあ　皆で飴を食べましょう

僕たちは庭へ出た

上を向いて
大きく口を開けた

域に在り

田伏裕子

コンビニのおでんを買いに行く
プラスチック容器が目の前から消え
欠片は海を漂っているという
大鍋にたまごを一個浮かべる

小鍋を持って豆腐を買いに行く
帰り道に転んでばらまいた
私とくずれ
かたちのない豆腐を見たときの
祖母の様子を憶えていない
私がいるこの一つの庭
覚えたばかりの素のままの
文字筋をつけては
平らかに掃き均す
木洩れ日を辿りながら廊下を拭く
光ったり消えたりしながら

日は揺れ動き移りゆく
「はばかりさん」
祖母の声がする
「はばかり」は
身を隠すことではないとわかっていた
繕うそばで
布から浮き上がり消えゆく糸に
重なろうとしている私に
「もう　いになはれ」

伝え来た
素のもじ
伝え置く
すもじ
よばれれば
在るだろう糸
声がする
「ようおこし」

ぬしゃだれ？

玉井洋子

しろです
ホワイト
オフホワイト
つるつるのすべすべ
蝋人形の冷たさで
ふれると
こころをもっていかれそうになる
目鼻を書けば妖怪に

果肉がとろ〜り
絶品やで
兄ちゃんの威勢のいい呼び込みに
つい買ってしまったのだけれど
茄子というには白すぎるこの植物
食えねえ

ちょっと兄ちゃん
妖怪なら騙されてもあげましょうとも
こちらも似たようなものだから
でなきゃ二度とあんたの店にはよらない
肩先をそおっと撫でて抜ける風
かそけきものの
白無垢姿の御寮さんを
火にかけて醤油でよごすわけにもいかないし

パープルパープル
やっぱり茄子はむらさきでなくっちゃね

日のあるうちに
・・の白
始末しなくっちゃ

お弔いの連中が戻ってきはじめた

うたう

玉川侑香

すこし　熱にうかされた日は
地動説の音を　聞いて
たんぽぽの散るうたをうたう

すこし　熱にうかされた日は
木陰をさがして
セミのうたを　うたう

すこし　熱にうかされた日は
こころおりたたんで　紙ひこうき

ひゅるんひゅるん
ひゅるんひゅるん

もういないひとのことばで　うたう

上石寺井美備子

月村　香

上石寺井美備子はいつも自分の名前にコンプレックスを持っていた花束の前に顔をうずめるようにしてしずしず寝る頃には顔に塗った油エキスをあぶら取りで押さえ朝が来るなり大きな目をまばたきして洗顔した上石寺井美備子が何歳か正確にはわからないけれどその名はその夕刻五時から六時ぐらいにするしずやかな瞑想とともに空気を晴らしたそれによって人々が幸福になったのかは誰にもわからないただなぜ夕刻に珍しきひとりのその悲しさが毎日毎日癒やされなかったのかかのために人々の方から上石寺井美備子を見つめていたのかいつまでも謎であったとにかく上石寺井美備子はひと言で言って美しかったのだ

白井由名花子

白井由名花子はふたりの女の子を生みましたが二人ともお花さまのようでありんしたお花と言うとあまりにも全体を全部全部指しますのでこの形容は正確な表現ではありません従って白井由名花子はひとりに雪々ともうひとりに花々とつけようとしたのですこうすると先程の論と合致しませんのでやはり花々はよして更更にすることにしましたこうしてゆきゆきとさらさらは出かけるときも帰ってくるときもかあさんことすきよと言って靴をしっかり履いて毎日を楽しむのでしたわたくしもどうぞ入れてほしかったくらいです今は大きくなって連絡もありませんがゆきゆきとさらさらの名とぞ存じます

バラ公園のある町

辻岡真紀子

何もない町のはずれに
バラの公園ができた

何もなかった町に
人がやって来た

風が、それとも
やさしい人の流れが運んだのか

気が付けば
名もない町の表通り、裏通り
路傍や空き地、駐車場にゴミ置き場
そして花を忘れた心にも
植えたはずのないバラが
芽吹いて
一輪　また一輪

花の環は広がって
十重二十重の思いを花びらに託して
心の棘が溶けてゆく

ほら
今日も窓を開ければ
見知らぬ花園から
あなたの窓辺に吹き寄せてくる
風は何色？

生きる

津田真理子

親しい存在を続いて亡くした
二年前にかあさん　一年前に愛猫シロ
唐突な死
操り人形のように動いている自分を
もう一人の私が見ていた
時間軸の先に死があるのではない
死は生のすべての瞬間に同時にあったのだ
空しさを感じることがある　と友人が言う
生者（せいじゃ）が空しいなら　死者はどうなるの
生きていることをかみしめる
家族がひとり　ひとりと欠けていった
一人残されたと感じた
家族の欠落という感覚が今変容しようとしている
一人の生活　未知の世界の幕開け
家族という繭にくるまれていない
生身の自分が世界に在る

不思議な解放感と自由の感覚
関係も微妙に質が変わる
生活を見直し　生活費の配分も変えた
時間の割り振りも変わっていった
これからの人生に思いをはせる
どう考えても今までよりこれからの方が
はるかに短い　ばんやりしてる間ない
本当に大事なことを心にきく
朝起きたら心のおもむくことからやっている
自然の流れが少しずつできていく

やりたいことをやりきる
余計なことで心を濁すのはもったいない
もちろん　空のかあさんとシロは
いつも私を見守ってくれている

メモランダム　暮色

寺田　操

活字中毒。本が読めなくなるそのときまで、可能な限り気になった本を読みたい。いびつな脳内環境は、幼児のときからの習性だ。増殖する本棚からため息がもれる。読まずに放置されています。遠吠え上げた獣はどの本の主か。本が消えて、消されて、『華氏四五一度』。脳内に蓄積した物語だけが記憶となれば、小さな容器だ、すぐに、心停止する。

乱暴狼藉。赤ん坊の目の前に本棚があった。目覚めての最初の運動は、ハイハイして本棚に向かい、本をひきずりだして、舐める、破る、放り投げる、奇声をあげる。鍋の蓋を、なめる、なげる、へこませる、ふんずける、遊び道具とした弟と、どんな違いがあったというのだろう。

稲妻が走る。恩田陸『きのうの世界』再読。粗筋の1／4くらいは覚えていたが、後は、象徴的なシンボルになる鉄塔、飛び地、喫茶店、雨になると店舗にするりと入りこんでくる猫、雨、双子の老女と飼い犬、見た物すべてを記憶する男の存在、彼と似た人々、古い共同体に隠された何か……そのくらいしか覚えていない。小説全体がどこへ向かい、どのような結末になるのか忘却の彼方。驚いた、こんな程度の本の読み方しかしてこなかったかと溜息。興味を惹かれる箇所には鉛筆でアンダーラインも引いている。気象、地図、世界、人の精神の在り方。足跡をたどり、点と線で繋げば、いくつもの伏線が張られていることに気が付くはず、何かが見えてくるはずなのに。歩いて、誰もいない。

境界線の喪失。『きのうの世界』は、此の世の人の営みの歴史を、神の目といってよい巨大なカメラアイでのぞき込んでいる怖さとドキドキ感がある。ここにいてここにいない人の存在。地面を山を水脈を断層を透視する人々の生きづらさが描かれる。人には当たり前のことがそうではないと感じることは苦痛だし、苦悩する要因ともなる。それにしても、ほとんど覚えていないという私の頭には慄く。それが普通じゃないかと…というのだが、予測できない展開が次から次へと起こり、事件への登場人物それぞれの関わり方や視線も気になる。沢筋、迂回路、坂道、土石流が流れ落ちてくる。読み終えるまでこの作品の「芯」が見えてこない、隠されているのも特徴のひとつだ。クライマックスに入ったころ、線状降水帯が世界を閉ざす。記憶はすっぽりと抜け落ちたままだ。

生存戦略。『植物はなぜ薬を作るのか』、『身近な薬草活用術』なんて、毒にも薬にも食用にもなる薬草の本が気になる。ピーターラビットの絵本でおなじみの妖しく人目をひくジギタリスが、野生化して生態系を荒らすとの警告。めまい、嘔吐、鹿さえ食べない美しすぎる毒草が廃線の上に繁茂する。赤いクコの実入りの粥が食べたい。胃腸がかなり弱ってきた。痛いほどの孤独、ではない。

風の手摺り

時里二郎

——その時、こたへてまを曰ししく、「縫へる衣を
櫃の底に蔵めるが如し」とまをしき。故、伎須美
野といふ——『播磨風土記　賀毛の郡』

詩が言葉を借りるのは
それが　記憶の耳であるから

どんな記憶であるかは　知れようもない
ただ微かな信号の飛沫のような
見えも　聞こえもしない
しかし　風の手摺りに触れるように
文字もなく　声もない　息絶えた未来の言語の痕
跡が
紡がれる言の葉を不意に騒がせる

この世界とはもはや交信することのない
消えてしまったいくつもの言語の痕跡
ぼくらのしわぶきや笑いや嗚咽や喃語のなかに
それらは記憶されているような気がする

だから　詩は誰かの記憶　ぼくではない誰かの

ぼくがさっき書いたばかりのあなたの詩
（密かにいつも行きかようあの場所を
伎須美野に擬したのは　あなただったが）
硬い木の人形のあなたが
かたくなな逡巡をほどいて
はじめてたてた声を
その伎須美野という文字の野に蔵めたのは
この世界と交信のない誰かの記憶の息を
あなたが呼吸していたから

ぼくが書き付けるのはぼくの言葉ではない
ぼくの記憶の岸に漂着した誰かの記憶の欠片

忘れてはいけないこと
それゆえに　忘れなければならなかったこと
ぼくの手をうながすのは
途絶えてしまった未来の文明のその記憶の疼き

こうして「縫へる衣を櫃の底に蔵める」ように
あなたとの時間を言葉に封じていると
見えない人の
聞こえない声のほうへ
伎須美野の文字の野面に
風の手摺りが
伸びていく

天秤ばかり

長岡瑛美

私の天秤ばかりは植物性の撚り紐で
天井梁から吊るされている
真鍮製の天秤皿も同様の糸で吊るされており
大人が横になれるほどの直径がある
それは晴れた日の空にも、雨雲の腹にも
建物の天井やビルの稜線の上にも垂れている
気づいたのは、父と弟が相次いで逝った年の秋だ
その頃、母はアパートのカーテンを閉め切っていて
線香臭い暗がりが、壁や家具だけでなく、心まで支配していた
母は重力に抗う力を失くして臥せっていた
眼を据わらせては「盗聴器がしかけられている・・」
と生臭い息を吐きながら囁いた
そのたびに、上目遣いになって唇をかんだ
目線を下げれば、母が蹲る得体の知れない暗がりに転がり落ちる気がした
そんな日の暮れ方、神社の石段に坐って空を眺めていると
中空に天秤ばかりが・・・

こちらの皿では、母と私が身体を寄せ合い
向こうには、父と弟が腰かけていた
私はここにいるのに、そこにもいて
しかも、そこからの光景も見渡せるのだった
空は濃い群青に閉ざされていた
足下には街の灯りが貧しい星のように瞬き
クラクションや泣き声や怒鳴り声が突き上げるたび
天秤ばかりは痛みのように揺れた
ごぉごぉと鳴る風音　鳥もいない寄る辺なさ
母は幼な子みたいにしがみついてきた
元々、色白だった肌は淡雪になって消えていきそうで
抱きしめると、自分にはもう、この人しかいないと思った
それからだ、天秤ばかりが現れるようになったのは・・
心のバランスを崩しかけると
天秤ばかりは天上縊死のように揺れた
ふるい落とされないよう、息を潜めては天秤棒を水平に戻した
何度も繰りかえすうちに
天秤ばかりの危うい均衡を保ちながら
ひっそりと生きていくこと
それが、自分の運命かもしれない・・
・・・漠と考えるようになった

invadars

中堂けいこ

もうだれも　わたしの名をよばぬ　から
丸くうずくまる　わたしの名　な
そのかたすみで　桃色のあかりともして
から　になる　そのつづきを

二回目の解熱鎮痛剤のあとも左上腕部の三角筋から
おこりのように緊張と痛みが拡がる　そこよそこ
びこんびこんと打ちませよ　たまに宇宙船が左によこぎる
おびただしい侵略者がきれいな方陣をえがきながら
わが惑星へのインベイドを試みる　そこよそこ
桃色のあかりのなかで　ここではだれも名をよばぬのよ
無名のままでよろしい
人差し指から　びこんびこん　だれを指しているのか
その少しばかりの液体は見事な方陣の設計図をしのばせて
筋肉に垂直に入りこみ　落ちてしまった

頭痛と空咳と耳鳴り　おなじ人差し指でアマデウスの四重奏を押してみたが
アレグロモデラートの主題で意識がなくなる
耳鳴りのむこう側で内耳からの振動が遮断される　あとは闇の底
から　っぽ

終音と同時に目覚める　あかりは消え　凍えるしじま
エベーヌ四重奏団のモーツアルトを　全曲聞きとおせないでいる
十五番の次のディベルティメントは内耳にとどまったまま
わたしの海馬にとどいていない
終音とはなにか　最後の和音の余波だけが差し出される
第一バイオリンの奏者の腕が伸び切るのを
見たようにおもわれる

松村由利子さんの短歌から引用した語句があります

道のべの木槿は馬に

永井ますみ

芭蕉はその日も早めに出立した
問題山積の江戸を離れたい
一年前に亡くなった母の墓前に額ずきたい
故里の伊賀への旅を急いでいた

弟子を一人連れて富士川を渡った
翌日には小夜の中山を越えねばならぬ
八月の峠に入るのだ
街道筋には茶屋があちこちに吊り旗をひるがえし
縁台には旅人が茶を汲み交わし
木槿が今を盛りと咲いておる

　道のべの木槿は馬に喰われけり *

木槿は中国の原産
健やかな枝をてんでに伸ばし

広く華やかな薄桃色の花びら
白居易の長恨歌に詠われた芙蓉にとても似ておる
華の中心に紅を差し
夏空に抜きん出ているのは雌しべであった

馬がふふふと柔らかな唇をよせると
いやいやをするように揺れた
歯をむき出し上顎の細い毛をこすりつけ
熱い息を吐きかけて
馬は執拗にむしる

木槿は馬に喰われたのであった
のけぞっても
屈み込んでも
その口から逃れることは
ついにできぬのであった

運命論者とわしを言うか
四十一歳の芭蕉は低く呟く

*松尾芭蕉『野ざらし紀行』より

生きざま

中川道子

一団となってダッシュ

必ず優勝　と
位置づけられ
騎手の決意ものせて
思いきり走りきるのか

パドックでは
はやる気持ちをおさえ
頭を上下させ
早歩きしていたね

晴天の馬場は
コロナ禍で無観客
空気が澄んでいる

君はどんどん抜いていって
先頭へ出た
四本の細い足を
思いきりけりあげ
たてがみ　ふり乱し
舞いあがるしっぽ
入り乱れ　もつれあい

ふりしぼる走り
ああ　ゴールイン　一着だ

体中から汗が
湯気となってわきあがり
勝ちほこった顔から
うるおう目がしばたいた

映像であることを忘れ
感動と郷愁が交差し
ひととき日常が遠のいていく

終

まさのおばあちゃんの畑

中島友子

隣の田んぼに
稲穂がにぎやかに揺れるのを見ながら
畑は一人ぼっちでした
まさのおばあちゃんは
朝　昼　夕になると世話に来てくれました
「しんどうて　土踏むだけに　畑へ行く」
と言いながらも
そのまさのおばあちゃんの土踏む音が
聞けなくなったのです
どないしとんやろう
弱っとんやろうか
畑は不安ですくんでいました

次の年
鳥の春のさえずりを聞きながら
畑は一度でいいから　一度でいいから
もう一度
足音が聞きたいと
まさのおばあちゃんが好きだった
まっすぐ上を向いて咲く赤い花
アマリリス　グラジオラス　チューリップなどを
とぎれることなく咲かせました
けれど　その願いはかないませんでした
いぶかる畑に
鳥や風は
まさのおばあちゃんが亡くなったことを
伝えました
深い悲しみの底
畑はどれだけ多くのことをしてもらったかを
誰も　まさのおばあちゃんの代わりには
なれないことを
知りました

会えなくなって二度目の春
畑はまさのおばあちゃんのために
白い水仙をいっぱい咲かせました
まさのおばあちゃんの土深くしみこんだ足音を
抱きしめて
新しい命を育み
つないでいこうとしています
背筋を伸ばして生きようとしています

にび色

空気がまるく穏やかに
陽が輝く春がやってきました
パステルカラーの春は
にび色の心にはまぶし過ぎます
戦争　虐待　天災
難病　コロナ禍
悲鳴が響く日々
春の訪れを
希望にあふれて待つことのできない一人です

東急目蒲線鵜の木駅

中嶋康雄

駅前商店街の焼鳥屋大吉で夜を過ごした
鶏スープを飲みながら麦焼酎のお湯割りを飲んだ
隣席の印刷勤めの男が塩多めの皮を串から噛みちぎりながら
宇宙人の話をしていた
宇宙人はミドリガメより緑だったというので
冷めた肝串のたれをズボンにこぼしながら
それはバッタだと思うと言い返すと
今度一緒に宇宙人に会いに行こうと誘われたので
いやだと答えた
男は戦時中に掘られた防空壕の話を始めた
そこで宇宙人をかくまっていたそうだ
日付がかわると店長の機嫌が急激に悪くなる
店長は五島列島の出身だという
五島列島がどこにあるのかもうひとつわからないが
魚が美味い島ということでやり過ごした
店長は暖簾をしまい午前一時を過ぎたころ

店に鍵をかけるがその直前までまだだらだらと
タクシーの運転手と残った焼酎をすすっていた
店長に肩をどすどすと叩かれて外に送られ
また明日
みたいなことを言われた
翌朝は未確認飛行物体がじりじりと五月蠅くいうので
元魚屋二階の三畳半汚い塒で目を覚ました
布団に生えた細長い茸が少し干からびていた
駅に向かう途中洋服店のおやじが店脇の植木鉢に水をやっていた
お互い幽霊になり損ねた姿を目で遣った
こんな場所にも
小さなクワガタムシが蜘蛛の巣にからまれて乾いていた
クワガタムシではなく黒い宇宙人かもしれなかった
区の集まりで鎌倉の大仏を見に行った
小学校の遠足で奈良の大仏を見に行った時鳩に糞をかけられた
思い出を披露すると場が和んだ
区の集まりの思い出は邦子のことが中心だ
邦子とその集まりで七宝焼きをやり
七宝焼の付いたネクタイピンをもらった
ネクタイピンは今でも他のネクタイピンと一緒に
宇宙人を待っている

今夜の眠り

奈木　丈

わたしの夢の中に
突然に登場してくる人たちがいる
亡くなっている人であっても
なぜか元気な姿を見せてくれる

夢の中に
突然に現れて
心地良い眠りを妨げる人が
いつもいる

わたしも
誰かの夢の中に登場して
役者のように
演技をしていくのだろう

どんな夢を見るのか

予想などできない
眠りの中で
未知の世界につれていかれる

心地良い眠りを続けたくて
夢を食べる獏に来てもらい
朝の光がさす前に
いくつかの夢を食べてもらった

消えてしまった夢には
叶わなかった物語の続きがあった
あなたとの幸せな日々がある
忘れてはならない悩んだ日々がある

新しい物語は
明日の朝になっても始まらない
今日と同じ物語の続きを見るために
今夜の眠りがある

開発に追われて

西海ゆう子

人生の半分以上をここに過ごした

朝な夕なに仰ぎ見、慣れ親しんだ里山
春の夏の秋の冬のそれぞれの光景が私の身体の一部となった
以前開発計画が頓挫しそのままであるはずもなく
今になって突然新しい業者が開発に手を挙げた
休眠地が活き雇用が生まれる時代は去り
ＡＩ（人工知能）の活躍の場になると聞く
この田舎暮らしが少し都市化するという期待は消え
木が切られ山が崩され始めた
これから先どうなって行くか想像に難くなく
崩された山が再び甦ることはあり得ない
この里山には小さな生き物が無数にいて
木を切られるごとに山が崩されるごとに
その生きる糧を失って行く
いつか出逢った臆病な鹿はその脚で逃げおおせるか

水辺にいたモリアオガエルも跳ねて
新たな水辺を見つけられるか
鳥はその翼でどこまで飛んで行けるか
原種の竜胆は篤志家の手で植え替えられたとして
無数の苔たちは干からびるしかない
あの山には様々な生き物がいて
そのひとつひとつが集まって木になり林になり山があった
老いたからこそ思い知る

後の世代はかってここに
鹿がいたとかモリアオガエルが産卵し
樹の蜜を求めて虫たちが飛び交った
そんな思い出すら語れまい
人の生活を豊かにするために開かれて行くはずが
抉られた山肌は涙を流し
大地をコンクリートで固めて生きるものを追いやって行く
果たしてこれが是なのか
唯々辛いのは老い先短い証拠かも知れない
黄蝶が足元から飛び立った、追われて何処へ行く

時が止まる

西村好子

時の始まったときには、何もなかった。砂も海もまた冷たい波もなかった。地は見当たらず、上に空もなく大きな口を開けた裂け目があったが、どこにも草木はなかった。

アイスランド「創生神話・エッダ」

プーチンの野望で時が止まった
黄金の小麦は血で染まり
急遽集合のロシア予備役は三十万
ほとんど弾除けとなり戦死した

ウクライナの映像は悲惨そのもの
幸福な生活は　一転逃げ惑うだけ
楽しい朝食を　土足で踏みにじり
射殺、絞殺、誘拐、拷問、強姦

時々　核の使用をほのめかして
脅し　インフラ設備を破壊して
行き場のないウクライナの人々を　極寒に突き落とす
毛皮のコートと帽子では到底寒さは防げない

真夏のベルリンでオーバーを着て夕食を平らげた私
真夏のスコットランドの夜　オーバーを着て野外劇場で感激した私
それでもなお寒かった
プーチンは暖かな宮殿で冬の到来を待った
EUの悲鳴とウクライナ人の凍死を心待ちにして

この戦争の行先は「エッダ」なのか

おひとりさま食堂

野口幸雄

夜がゆっくりした足取りでやって来る
おひとりさま食堂に灯がともります
お客になれるのは
一人暮らしの人だけ

大企業に就職してバリバリ仕事をやってます
だから淋しくはありません
でも　映画や芝居を観ての帰りには
おひとりさま食堂に寄ってしまいます

白髪頭の大将は
「いらっしゃい」の一言
肉じゃが　さんまの塩焼き　野菜のたいたん
おばんざいが定番メニュー

客が何かを話したそうだと感じれば

「秋だねぇ」などという
それをきっかけに観てきた芝居の話をする
「へぇー」などと感心してくれる

それだけ
ただそれだけで
満足して帰るのです
部屋の灯りを自分で点け　自分で消す

明日も仕事だと
眠る
この国では
おひとりさま食堂が増えているらしい

トンネルを越えて

信定和美

あばら骨の真ん中を
飛行機が飛びたつ
西の空に向かってつぎつぎに
果てしなく広がるあかねの空間が車窓に

彩色で
はなやぎをます
秩序のないマッチ箱は
レンガを貼ってもマッチ箱のまま

左頭頂部　眼球の上が
締めつけられる
病をかかえる人の
工場の無機質の灰色

あるひ　もりの　なか

くまさんに　であった
はなさく　もりの　みち
くまさんに　であった＊
車内で幼子が手をたたきながら歌う
よかった　よかったね
清い声の車内を包み
お母さんは幼子の手をにぎり
にっこりうなずく

走り走れども
その位置は変わらない
埋めつくされ息も絶え絶えだが
心を惑わされはしない

トンネルを超える

＊作詞馬場祥弘　作曲アメリカ民謡

雀

野元　正

雀がいなくなった
幼いとき　チチと声
を　よく聞いた
何処へ行ったの

野菊の咲くころ
浜辺に集まって
海に旅立つ
と　聞いた
雀は貝になるんだよ

貝は蛤
渚近くで
波の音となって
繰り返しうたう
聞こえるかい

一歳（ひとせ）　過ぎて

沙羅の花が咲くころ
海から戻って来て
滅びゆくものの
歌をうたう
哀愁（うれいかなし）む声だよ

沙羅の落花のころ
庭師は雀蛤の庭*
を　夢見て
りょく緑たい苔に石をおく
雀よ　戻っておいで、と
楓（かえで）が紅や黄に染まるころ

雀蛤の庭
で　疾風に　紅葉が舞う
瞑想する　独（ひと）り人（びと）
刻（とき）よ　止まれ、と

霜が降りた朝
我が庭で　チチと囀った雀
今はもう
聞こえない
何処へ行ったの

＊雀蛤の庭　雀が秋になると、海辺で騒ぐの見て、やがて海に入って蛤になるという中国の俗信から、庭石を雀と蛤に見立てて据えた庭園。有馬の念仏寺が沙羅の樹とともに有名。「すずめ雀はまぐり蛤となる」二十四節気の一つ。俳句の季語。

帰る家

橋本千秋

十日余りの旅行から帰ってきた家　プランター の花が植え替えられ　ベランダに私の物がない洗濯物が干されている　食器の置き場所が違っていて　冷蔵庫の中身が入れ替わっている　どこかよその家に帰ってきたようで持ち帰ったスーツケースを見ていると　この街も途中下車した街で　どこか他に私の家がありそうな気がする

叔母たちが帰っていった夜　祖母が部屋を見渡し　家に帰ると言い出した時　家付き娘の祖母に　帰る家はどこにもないのにと母と顔を見合わせたが　いつの頃からか　祖母のタンスの中に用意されている旅支度がある

エンドロール

目が覚めて
夢を見ていたと
気づく朝
射し込む光の中で
目を閉じて

瞼裏を
見ている

ヒイジイサン

八田光代

野口雨情作詩の童謡
「赤い靴」の
一番の歌詞

赤い靴はいてた
女の子
異人さんに連れられて
行っちゃった

この中の
異人さんというところを
ヒイジイサンと覚えていた子がいて
ずっとそう歌ってた　と
最近は
異人さんは死語になったのか
長寿社会になって

ヒイジイサンが
そこここに大勢いて
ヒイジイサンの方が
イジンサンより
一般的になったのか

我がつれあいは
八十五歳
もうすぐ
ヒイジイサンに
なる

三日月の夕

馬場秀司

暮れなずむ初秋、
犬にせがまれて散歩に出ますと、
大空は青とも黄金色ともいえませぬ。

そこに透き通った三日月が
ポッカリと、おりました。

刺すような空気を感じつつ、
首を上にぢっと持ち上げて、
いくばくの時間でしょうか。

ふしぎ、ふしぎ、
三日月が笑っているんです。
そう見える自分が笑えてくるんですが、
あまりに面白く、
何度も見上げてみるのだけれど、

やっぱり笑っている、
ように見えるんです。

病んで眩暈する絶望の淵、
病気、病気と、心の反復が阿呆らしく、
私も微笑み返し。
いやはや、笑う力が残っていたなんて。
いつどき以来でしょうかね、笑ったなんて。

そういえば、笑わなくなりました。
人を笑わせなくなりました。
小さな幸せさえ消えてしまいました。
人を笑わせるのは善なのに。

笑っていたころの思い出が、
わーわーわー。

人を笑わせた思い出が、
わーわーわー。
知らぬ間に涙が出てきて、
私の気持ちはどうなってしまったのか制御不能。

三日月を見て
泣いている変な年寄り。
格好わるいですよね。
笑っているはずなのに、涙する。
でも、久しぶりに美しいと思う心が芽生え、
それが嬉しかったのか悲しかったのか、
自分の気持ちさえ、わかりませぬ。

他人の心、自分の心ですら、わからない、
いつもじっとしていない心。
いつも同じではない心。
心はめまぐるしく変わり、暴走します。
諦念すべきか嫌悪すべきか。

そんな人の心に翻弄され、
髪の毛が一本ずつ抜けていき、
顔のほくろやシミも増えていき、
ふと鏡をみると、怒っている年寄りがおりました。

「笑ってみなよ、嘘でもいいから」
「虚妄に浸ってみるのも悪くないから」。

三日月は、三日月は、
そんな風にいいだけな雲の間で、
ただ、微笑むだけでした。

ほどなく、言葉のいらない夜になりました。
黙祷。

思い出

浜田多代子

崖の上に
黄色いショベルカーが一台
崖下は小さな棚田
山を削った崖のそばには
荒い土がなだれ込み
棚田を覆い隠し
土の下から辛うじて見える葉の先端から
細いしずくが落ちている

むき出しの崖の下の棚田にも
いつの間にか
トラックが止まり土を運ぶ
何回も何回も
山はだんだんと削られていく
だんだんと細くなっていく

子供の頃　なだらかな丸い山
竹笹が生い茂った
けもの道を駆け抜ける子供たち
小鳥が飛び交い
鋭い声で掛け合いに鳴く
谷川の水は冷たく
子供たちの喉を潤した

山を知らない人々が
土を取りやせ細った山の
崖下の整地に家を建てようとする

頂上で車座に座り
山ブドウを食べた遊びの山は
思い出だけに残り
もう
現われることはない

あおいじかん

原田ひでよ

とっぷりと日が暮れて
真っ暗になる前の
ほんのみじかいときを
わたしは　青い時間と呼んでいた

幼いむすめは
可愛い声で　カタコトのように
アオイジカン　アオイジカン
と繰り返した

一緒にいられるときは
かならず
あおいじかんやな
と澄んだ声で言った

わたしがうつむいていると
あおいじかん　終わってまうよ
と大人びた声で呼びかけられ
顔を上げることもあった

その声は
いつしか
あおいじかんが訪れると
わたしの中に
灯るようになった
海の彼方に臨む
灯台の光のように

カーテンコール

ピアニスト
マルタイン・フアンデンフック氏
二〇二二年八月二十五日永眠
偉大な師を悼んで

――その人を知る人が
ひとりもいなくなったとき
人は初めて本当に亡くなるという――
ならば

何度でも呼ぼう
彼の名を
彼を舞台へ
鳴り止まない拍手で
眩い舞台の中央へ

何度でも　呼び続けよう
そして
耳を澄ませよう

ゆるぎなく構築された
巨大な建造物を
よどみなくほとばしる
透明な水しぶきを
誰をも包んだ暖かい
陽射しの明るみを
ボタンほどの小さな
鳥のさえずりを

ほら
届けに来る
足どりも軽く階段を降りて
あの笑顔で

何度でも
何度でも

届けに来る

届けに来る

水蛭子　hiruko

坂東里美

湿った落葉と土の　くぐもる臭いに深く囚われていた　私は　紡錘形をなぞっていたが　むしろ線的で　あるかもしれない　息を細く吸って　また細く吐き縮み　長く伸びて　揺れてみる

目は　つむっていた　あるいは見ることを拒んでいた　日々のため　退化してしまったようだ　触れる　と言葉が　見えない瞼に　浮かんだ

もう永い時間　待っていたという感情が　喉を逆流して　舌先を　黒い棘の形に　尖らせている　生暖かい唾液が漏れる

息と体温のにおいが　緩やかに押してくる　濡れている柔らかい　肌に　舌の湿り気を　突き刺して　吸いつく　垂直的　睡眠期へと

I'm full. I'm fool.

光度を　思い出した　主観的明るさの中にいた　や否や　嫌悪の悲鳴とともに

熱いシャワーの　濁流に呑み込まれた　のは夢の続きか　渦を巻いて　丸い排水口に吸い込まれていく　私は　また　暗闇に流される線的異形

次は　どこに辿り着くか

先はわかっている

福田さとる

あるスーパーでは
１００円ショップより安いお菓子があり
私はそのピーナッツが好きで必ず買っている
こんな時　駐車場へ向かいながら
明日への不安を忘れて　この今だけを歩いている

母の一通りの介護関係の書類を作り
提出できるようになった
さらには締切まじかの年金申請の書類も
ようやく作れた
今の自分では　作成前に
いくら説明文を読んでも十分にわからない
という不安を語らず
もうできたぞ　先はわかっているぞと
歯を食いしばる

テレビではワイドショーで
ウクライナの悲惨を語っている
私も　もっともだとプーチンを批判する
でも　数年後には日本はウクライナの悲惨に
投げ込まれているようにしか思えない
そんな不安をワイドショーの人たちには
どうしても感じられない
もうわかりすぎている　これからの地震と戦争に
政府も人々も不安を感じていないという不安

私は家に帰って　お湯を沸かし　お茶を飲んで
少々のピーナッツを食べる
人々がこんな風に来年も　いや十年後の今も
こんな生活ができますように
世界の人々の今の苦しみが無駄に終わることなく
せめて未来の人々の小さな幸せをもたらして

何かをしているようで何もしていない私と
まったく同じに批判だけの人々にも
未来の小さな幸せが頂けますように
祈りながら　でも何かをしたい

ウクライナのことでウイグルはすっかり
忘れられていますが
ウイグルの人々も未来の日本人も
たいして変わることはないという私の予感が
新しい不安になり
私は小さな日々の具体的な生活不安の中で
ただ買い物に行き　孫と遊んでいる
そして　この息は世界中の人々と同じ空気を
吸っている

ピーナッツを食べることが究極の安心になって
お茶を飲んで　散りゆく桜を見ながら
黙っていられることは
今の瞬間の少し恥ずかしい幸せだ

それでも　先はわかっているぞと
呟いている私

咲きかも散ると

福田知子

櫻花咲きかも散ると見るまでに
たれ誰かもここに見えて散りゆく
（柿本人麻呂・万葉集）

いまここに　わたしたち
櫻のごとく　咲きつどう
若やいだ樹　苔むした樹　病んだ樹……

樹を見上げれば　残りの花びら
樹を見下ろせば　過ぎ去りし花びら

陽に誘われるごと　春になり
熱をおびつつ　花ひらき

風にあおられ　宙（そら）に舞い
水に誘われるまま　花筏（はないかだ）

そうして　いつしか
土に呼びもどされ　土に還る

ここに植えられた　櫻
ここにつどう　わたしたち
根を張り　一心に――――

せめて
花びら
あえかに
叫べ

いまここに
咲きかも散ると

――亡き詩人　田村周平さんに

祈り

福永祥子

菜の花　タンポポ　れんげ草
春の畦道を　おかっぱ姿の私が駆けて来る

哀しみの心に　海を抱いて
十九の夏が過ぎました

生きることは
ひとつ　ひとつの
願いを結ぶこと
そして
年月を少しずつ引き寄せて
視えないものを　視る勇気
聴こえない声を　聴く優しさを
多くの冬を体験して初めて身にまとう
許しあい　信じる力を

秋の野辺へと旅立って逝った人たちよ
視えていますか
聴こえていますか
大空の彼方ではにかんでいる
あなたの笑顔にいつか逢える
きっと逢える

祈るカタチに両手を合わせ
あなたと私の願いが結ばれる

菜の花　タンポポ　れんげ草

井の中の蛙「道程」を想う

星ヶ崎ルミ

「詩」という一筋の光に誘われるまま
ルミ蛙は上へ上へと登っていき、
井戸のふちに辿り着いた。

見るとそこはどこまでも続く
平地が広がっていた。
この平地で詩を書きながら
ペタペタ　ぴょんぴょん
と行こう！

いつか再び光が現れ
私の魂を天へと
誘ってくれるその日まで・・・・

痛む右脚をさすりながら
ルミ蛙はそう思った

＊道程「高村光太郎」の詩より

ローラー

牧田榮子

パソコン画面の丸い果実が光る
魔法使いはにんまり
作業の仕上げにローラーを
鉄筋15階建て26年目
松林にお馴染み　海辺のホテル
行楽　修学旅行　式典　ランチの約束
上空を旋回する野鳥たち

早朝から１００人ものヘルメット
巨大クレーン　大小の圧砕機
毎日毎日　ガオングォン
切断の火花に散水が枝垂れ
めっぽうな費用かけ
作業員のいない暗闇
丈夫な床　頑丈な壁
力自慢の柱　だった

嗚咽が聞こえる

一年がかり　痕跡もなく

ローラー車2台　遊んでいる
空　地面　均される
野鳥たちはどこ

顔にも手にも　草の根より細い皺
パソコン画面の丸い果実が光る
電動フェイスローラー
と言いたいところだけれど
あこがれは　あの二月の初なひかり
頬にささやかな明るさがあれば
ローラー
部屋の掃除機用でいい

蝉

増田まさみ

庭の片隅に
蝉が一匹
止まっていました
空想の山毛欅の森で
いのち限りに鳴いて散った
うからの聲を
じっと聴いている
ようでした
……
鳴くべきか
鳴いていいのか
鳴かないでもいいのか
と。

失望

虹がでた

錆びやすい七色の
針金
空を掻き
きみを泣かせる

想いは
（消毒ください）
繃帯のしたの
ヒステリックな
虹の亡骸だ

ソーシャルビオトープ

松下玲子

我が家から三キロメートル程　東方に位置する旧湊山小学校跡地に　今年七月　オープンしたソーシャルビオトープは　自然と暮らしをつくる施設
一四一年の歴史が残るその跡地には治承四年（一一八〇）平清盛がにわかに平安京から福原への遷都を命じた「雪の御所跡」の石碑が今も残っている
天王谷川と毎年五月には沢山のこいのぼりがはためく石井川にはさまれたバス通りに面している　残した校舎の両側面に立方体に木材を組み込ませて作った高い建物が現代アート風になっていて一段と目を引く　主に植物園と小さな水族館と地域の施設の名称
運動場跡に　ハーブなどの下草が沢山植えられ　果実の木や大きな木も植えられているが今はまだ若木ばかりで目立たず　何年か先　ハーブの香りの中森が出来　大きな木陰が出来　小鳥がさえずり回る喜びの図形を夢見ている
アメリカ・インディアンの言（こと）の葉を借りる

新しき種に捧げる祈り
時は春
母の大地の湿（しめ）るころ
あなたは母の体内に

あなたの種を埋めるでしょう
用心深く種たちは
きっと芽を出すことでしょう

小さな水族館は本当に小さくて　海水　淡水に住む小さな生きものがほとんど　珊瑚礁の中をスイスイと素早く動き回っている　姿　形　カラフルな色は何故こんなにも美しいのだろう　異次元の世界に魅せられる「コンゴテトラ」の横一直線のブルー　鱗が時々虹色に光り　水の中で光が踊っている
水になった若者の詩
　海のできるまえに水の精があった
　かれらは水そのものだった
　水のやわらかい羽毛はかれらのものだった
　水の精の娘たちにとりかこまれ
「さあ　ダンスをしましょう」
　と　いうわけでかれらは　水の精たちと踊っていた
を引用させてもらう

他になまけもの　大きなかめなどもいて　刻が錯覚してしまいそうになる
現実と空想と異次元がこともなげに存在しているひとときでした

まあだだよ

丸田礼子

山道が
夜明けの夢に現れた
上りつめたところ
何があるの
子どものころは
怖かった
今　手招きするのは
誰だろう

失うものもない
軽い身に
降りかかってくるまなざしは
ちちの眼
ははの眼

草の実のままごと

鬼ごっこやかくれんぼ
野山を巡り　巡る

ひとりの日々は長く
待っていたそのときが来たと
手を伸ばせば
まあだだよと
光がカーテンから洩れ出て
目覚める

ゆるゆると
起き上がる
再びの
朝

静かな夜

水こし町子

記憶の奥深くに
沈んでいた一つ一つ
静かな夜
年月が経ち
消えかけている
写真を見るように

ザトウクジラが
海の中で仲間を呼ぶ
鳴き声を聞いたことがあるか

一歳の時
名古屋の空襲から乳母車の上に布団をかぶせ
火の粉を防ぎ逃げたと
覚えていないのに
母から何回も聞かされた

テレビの中で今
ベビーカーに乗せられ
逃げていく小さな女の子は
乳母車の中の私にすりかわり

その時私は
眠っていたのか
泣いていたのか
まだ言葉を持たない時から
今まで
どこにもない言葉を
探し続けている

静かな夜
海の中で仲間を呼ぶ
ザトウクジラの言葉としての
鳴き声が聞こえてくる

母のいる風景

室井正彰

黄色く熟れた麦畑の千把扱ぎの仕事が終わり
空海縁りの黒沢山光明寺と中世の大鷹山古城跡の
山間に沈んで行く真っ赤な太陽に輝いて
ぼくらは忘れない
母が口ずさんだ千把扱ぎの唄を

一把扱いては　千仏供養
二把扱いでは　万仏供養
えんさらえーいと　お扱ぎあれ

三把扱いでは　父親供養
四把扱いでは　母親供養
えんさらえーいと　お扱ぎあれ

千把扱ぎの辛さを偲ばせる唄声は
東の行基開山医王山験行寺の上の　富士のように
聳える鷺ケ堂古城址の山巓の　薄明かりに浮かん
だ月に向かって真直ぐに登って行く　其処になき
父母との懐かしい団欒の姿が見えるかのように

五把扱いでは　夫思い
六把扱いでは　夫偲ぶ
えんさらえーいと　お扱ぎあれ…

そして　ぼくらは忘れない
太平洋の南の島へ飛んで
若くして戦死した父のことを
夫を亡くして　女手一つで
ぼくら四人を育ててくれた母の苦労を

七把扱いでは　子を思い
も一つ扱いでも　子を思い

千把扱いでも　子を思う
えんさらえーいと　お扱ぎあれ

……今日は母の法事　四人の子らが集まった
二人の兄は学校の教師　弟は設計事務所を経営
そして妹は造船所の社員の妻
それぞれの連れ合いや孫たちも集まって
「不良にもならず　まずは立派に成られた」と
住職が声を出して笑い
ぼくらも手を叩いて　声を上げて笑った

お勤めが終わり　ぼくらは縁側に並んで
ふるさとの夕焼の空を見上げる
今日も　空海縁りの黒沢山光明寺と
中世の大鷹山古城跡の山間に
浮かぶようにしては
真っ赤な太陽が消えて行く
母の姿も消えて行く
ぼくらの記憶は追っ駈けて行くのだ

そして母よ　あなたと出会うのだ
若い日の　美しいあなたの
けなげな千把扱ぎの唄が聞こえて来る
あの麦畑の辺りで

（千把扱ぎは太平洋戦争後も
使用した麦の収穫用農具）

放送部の狭い部室で
ジョン・レノン『イマジン』にのせて

望月逸子

高校生のとき
私は放課後毎日　放送部の部室に居た

一九六〇年代後半
ビートルズの全盛時代
防音構造の狭い部室には
音響作業のＢＧＭの様に
ビートルズナンバーが　絶え間なく流れていた
放送部では　高校生が一度は教科書で出会う
萩原朔太郎の『竹』や
金子光晴の『くらげの唄』等の
有名な詩人の作品を一篇選び
それを音楽にのせて朗読し
作品の背景を解説する文芸番組や
古今東西の楽曲を紹介する音楽番組を制作し

皆が弁当を食べる昼の休憩時間　全校に流していた
毎日部室に流れていた　ジョン・レノンの歌声は
ビートルズに　さほど興味がなかった私の胸にも
知らない間に　沁み込んでいたようだ

若かったジョンが『イマジン』を歌う
古いＣＤから響く声が　ゆくりなく哀しみを呼ぶ

今日は　十二月八日
一九八〇年
愛と平和に満ちた未来を目指し
世界中で歌い　共感を得ていたジョン・レノンの
「今」と「未来」が
凶弾によって　撃ち抜かれた日

渋皮煮

森田美千代

秋の日ざしに打たれ
空を仰ぐ
長かった道のりとこれからを指先に

雲の隙間から声が落ちてくる
みどりに萌える　輪
若い父と母
若い叔父と伯母
幼きいとこたち
雲が途切れた
影踏み　石蹴り
はしゃぐ声

秋の陽射しを受け
ワイン色のベレー帽の伯母　そこに
こみ上げる言葉

喉の奥に
夫も息子も孫までも
急いで月に誘われ
ぬかるみの道を歩いてきた
哀しみと諦めが渦巻く
日々

秋彼岸はいつも栗の渋皮煮を供える
固い皮を無心に剥く
たまり色の灰汁は無念の色
ぶつぶつ　じゅつ　じゅうちゅっ
怒りの泡　吹き出し　もつれ　止まらず続く
なんども灰汁を
しーしゅう　しーしししし
しずかに　しずかに　穏やかに
砂糖と少々の塩を入れ
感情を沈め
秋をまとう

秋

山口洋子

こんないい日には
空に向かってうそをつく

こんないい日には
植木屋さんが脚立を上るだろう

たわんだ電線
くもの糸がゆれる

すこしずつ
伸びるわたし

なんだか
ゆうゆうするなあ

こんないい日

彼岸花の田んぼ道を
ひとりじめ

立派な空だ

あなたのうそ
も
きっとなびいているから

光を

山下輝代

やみのなかの
ひかりをみつける

やみのなかに
こそ
真実のひかりがあるのだと。

目を瞑る

やがて
こころがみえるきこえる

見えてくるもの
聴こえくること

いまこそ
見失わずに

秋の訪れ

カーテンのひと揺れに
心が大きく動く
いつになく泡立つ

季節が移りゆく頃
きまって
そんな朝がやってくる

あづかりもの

うけとったもの
うけとったこと
いよいよの覚悟で

残波

山下晴久

そこは日が沈む
最後の場所
それは打ち寄せて
なお残る波の景色
なんのこれしき
なんのこれしき
夕日が海に
光の道を作り
私は一人
砂に埋もれた
玉手箱を探す
誰もいない浜辺で
砂も一人で
泣くのだろうか
地図にも　海図にもない
御伽の国は（きっと）

初めから無かったのだ
岬の向こうには
違う世界があり
また別の物語が
生れている
目を凝らすと砂は
とても小さな
珊瑚からできていて
あの日のことは
誰も覚えていない
なんのこれしき
なんのこれしき
波間には過ぎた日の
夢と希望が
小さな舟のように
揺れている

なんのこれしき
なんのこれしき
あの日もきみは
海に向かって
さけび続けていた

漂白

山中ゆきよし

無窮のうれひの
なかぞらを翔けてゆく
ものがある

たかく　ときにひくく
豊葦原の瑞穂のくにに
つめたい一瞥を投げ
けしからぬスピードで

天の非情のえもいへぬ美の酷薄
地の貪欲の精緻きわまる悖徳（はいとく）
生と死のかたみがわりの止めどもない
重複。神の悪辣。

怯へる胸板のうすい肉置（ししお）き

これが
おまえの
いのちの
正体だ
といふ

戦場の子どもたち

山本眞弓

銃痕の残る壁
大小のいびつな孔に向かって
石を投げる
うまく通り抜けるよう
次々に投げる
つかの間興じる

破壊された戦士のバイク
四人跨り
先鋒の子はヘルメットにサングラス
意気盛んに
そのまま冬の空へ駆けのぼる

ブランコの綱も切れた
教会の屋根も吹っ飛んだ
がらんどうの教会で祈るのはイヤ

野の花を摘み
父さんの十字架に
小鳥になって
小さな祈り届けたい

ひとりたりとも欠けてはならない
こどもの死を断じて被写体にしたくない
ウクライナの女性ジャーナリストは言う

白い画用紙にひたすら描き続ける
アニメの女性戦士の顔
長い前髪を払いもしないで
突き刺さる白黒のコントラスト
心の闇を吐き出す

彼らに帰る家はあるのか
突然始まった理不尽な戦争
未来を奪い土に埋めても
記録はいつか語り出す

まがり角

山本彰子

朝の散歩
補高靴を履くとき
背骨が痛む
まがり角で
いい香り
近づくと
白梅の脚が
ブロック塀と防火水槽に挟まれて
歪なかたちで伸びていた

股関節の手術を三回した私
左脚が短くなって
背骨が歪んで
ひょこひょこ歩く

白梅よ

おまえを歪ませた彼らが憎くはないか

憎むと心が枯れてゆく
朔の夜
根の力を借りて
防火水槽のフェンス
を　ふとももで
押していくの
根気よく
そう
わたしは彼らを抱いて生きてきたの
彼らが居なくなるとわたしは倒れる
それにほら
歪むから見えた景色もあったでしょ
あなたにも

そう
私も
明日へ
まがり角

言葉の海

横山美代子

『青い鳥』を読んで買った　青色のインク
長い間を経て　ふたを開ける
ペン先を通して
指先から生まれでる文字
『人魚姫』の人魚が住むという
矢車菊の海の色に変化
言葉の中にある記憶
過ごしてきた日々が　すきまに
過去から現在までの積みかさなっている
空気の層
心の断片が　息をひそめて　息づいている

見た事もない青い鳥
深く美しい海を　思いうかべて読んだ物語
二つの色にひきこまれて
長い時間がインクの中に　沈みこんでいく

幸福は家の中の理想
今も青い鳥を探している
何十もの小さな花が集まった　矢車菊
手を伸ばしても　差しだされない深い海
声は出そうとしても　言葉にならず
波間に消える
小さな一輪ずつが　うずを巻き海の底へ
時のはざまに　のみ込まれていく
何かを拾いながら　過ごすインク
矢車菊の青の海　思いはどこをさまよう

探し続ける
言葉の海
命ある限り

愛すべきは誰か

凛　清太

――私の前をよぎっていく
　この人の群れは何か

　先頭者は身の丈を越える十字架を背負い、その端を引きずるように歩む。
　先頭者の後を横に数列、十数列、数十列にふくらみ、いたるところで蛇行し滞りながら、列は延々とつながっている。
　連なる者達には先頭者の姿はおろか、その気配さえも届きはしないのに、前列からどよめきが伝わると、皆が皆立ち止まり、ひとしきり天空を仰ぎ見て、祈りとも溜息ともつかぬ声を発した。
　そして、流れは益々停滞するのだが、この暑さの中で、誰一人として不平を訴える者もなく、男も女も衣服をはだけるだけはだけ、砂塵と喉の渇きに耐えている。両脇から支えられなければ歩めぬ者もいた。
　だが皆、信じきったように眼を輝かせている。

――一体、何処へ行こうというのだ

　先頭者が倒れた。
　すぐ後につく者が四五人駆け寄り、抱き起こして水を差し出したが、先頭者は静かにそれを振り払って立ち上がった。が、すぐまた、膝を折るようにして顔を砂に埋めた。
　仰向きに寝かされた先頭者の口に水が注がれた。先頭者は喉を唸らせて、その水を飲み干した。そして漸く、支えられ立ち上がった。
　歓声が上がった。
　拳を突き上げる者、合唱する者、涙する者、安堵のあまり気を失って倒れる者。歓声は嵐のように渦巻いて後部に流れ伝わった。
　群れの中に、喧嘩別れした懐かしい友の笑顔が、歓喜する妻の顔があった。
　姉達もいた。狭間に母や伯母の顔も見え隠れし、やがて、列の端にうずくまるのが見えた。
　私は群れに向かって、叫んだ。
「水はある。一番前にある。いま、お前たちの主が飲んだ」
　だが、誰も振り向きはしなかった。
「水はここにもある」
　私は水袋をかざし、駆け出した。
　一人の女が私に気付いて、私の前に立塞がった。赤子を抱いた端正な顔立ちの女だった。
　そのいでたちに、どこか見覚えがあった。
　女は言った。歓声で聞きとれなかった。
　女は大声で叱りつけるように言った
「不埒者。お前は神の許しを得たものではない」
　私は怯まず答えた
「ああ、そうだ」
「一度だって、神の前に跪いたことはない」
「だが何故、その私が水を分け与えてはいけないのか」
「……」
「この者達と私と、何が違う」
「ここに居ることが、皆と同じ証ではないのか」
「……」
「私に、隣人を愛せよと、教えたのは誰だ」
　女は私を指差し、言った。
「お前は、最後の最後まで神を信じ切ったことがあるのか」
「己すら、信じては、いまい」

生死の橋

渡辺信雄

出て来いよ――
小鳥たちが
澄み渡った声で　呼んでいる
階段を下りて
茜色に染まっていく場所
枯葉が降り積もる　林の中の
小さな　白雲大明神に　参る
愛した蝉の　亡骸を供える
神の言葉は　ビリビリに破けて
密やかに揺らめく焔
先に逝った者に　手を合わし
鈴鳴らし祈る
中空から　何の実か 地に落ち
コーン コーン　と跳ね返る音が　する
共鳴する　虫の声 鳥の声
この生は「邯鄲の夢」か

我が神仏　jazzを即興演奏し
呻りながら　歌う
（この場所は静かな最前線・・・）
転んでは　全身で 匍匐前進する
土と交わり擦りながら
死とは永遠のことと気づく
いつの日か　生死の橋を
みんな渡る

＊「邯鄲の夢」
「邯鄲」とは、中国の戦国時代の趙の都市のこと。盧生という貧しい若者が、邯鄲で呂翁という道士から不思議な枕を借りて一眠りしたときに、紆余曲折を経て立身出世を極めるという体験をした。しかし、それは実際には店の主人が炊いていた黄粱もまだ煮え切らないような、ごく短い間の夢にすぎなかった。

会員の発行物（詩集・詩画集、主宰詩誌ほか）

〈2020年11月～2021年5月〉

牧田榮子『倉橋健一の詩を繙く』（澪標）
芝本政宣（柴田実）『神戸・姫路の画家たち』（神戸新聞出版センター）
紫野京子詩集『霧の馬』（編集工房ノア）
渋谷魚彦詩集『青をあおぐ』（澪標）
高橋冨美子詩集『夢泥棒』（思潮社）
高木敏克詩集『発光樹林帯』（澪標）
猪谷道子詩集『蝙蝠が歯を出して嗤っていた』（澪標）
和比古詩集『蒼き旅』（遊文舎）
神田さよ『東北ミニれぽーと』（私家版）

〈2021年6月～2021年11月〉

和比古詩集『モザイクの空』（土曜美術社出版販売）
牧田榮子『わたしの絵本ノート』（澪標）
黒田ナオ詩集『ぽとんぽとーんと音がする』（土曜美術社出版販売）
森田美千代詩集『片道切符の季節（メランコリア）』（澪標）
山本眞弓詩集『ティータイム』（澪標）
今村欣史『縁起　小墓圓満地蔵尊』（小墓圓満地蔵尊奉賛会）

〈2021年12月～2022年5月〉

荒川稔詩集『ことわり付喪神』2021・9刊（七月堂）
丸田礼子詩集『夕陽が背中を押してくる』2021・11刊（澪標）
以倉鉱平詩集『我が夜学生』2021・11刊（編集工房ノア）

以倉鉱平詩集『明日の旅』2022・4刊（編集工房ノア）
青木佐知子詩集『官界の行方』2022・2刊（澪標）
季村敏夫『1920年代モダニズム詩集』2022・4刊（思潮社）
今村欣史詩集『恒子抄』2022・5刊（私家本）

〈2022年6月～2021年10月〉

江口節詩集『水差しの水』2022・9刊（編集工房ノア）
永井ますみ監修『詩と鉛筆』（詩と鉛筆の会）
野元正『薄紅色のいのちを抱いて』2022・9・14刊（幻冬舎）

会員の発行詩誌

〈2020年11月～2021年5月〉

「鶺鴒」15号／江口節
「ガーネット」92号、93号／高階杞一・神尾和寿
「現代詩神戸」272号／三宅武・永井ますみ
「EDGING」48号／寺田操
「まほろば」50号／たかはらおさむ
「汽水湖」3号／福永祥子
「別嬢」113号／高橋夏男
「あむの木通信」139号、140号、141号、142号、143号、144号、145号、146号、147号／福永祥子
「遥」3号／和比古
「木想」11号／高橋冨美子
「ア・テンポ」58号、59号／玉井洋子
「時刻表」9号／たかとう匡子
「RIVIERE」174号、175号、176号／永井ますみ・横田英子

「Contralto」42号、43号／坂東里美
「ターミナル」15号／神田さよ
「風の音」21号／野口幸雄
「多島海」37号、38号、39号／江口節
「Messier」53号、54号、55号、56号／香山雅代
「月刊めらんじゅ」157号、158号、159号、160号、161号、162号／大橋愛由等

〈2021年6月〜2021年11月〉

「現代詩神戸」273号、274号／三宅武
「Contralto」44号／坂東里美
「まほろば」51号／たかはらおさむ
「ガーネット」94号、95号／高階杞一・神尾和寿
「EDGING」49号、50号／寺田操
「遥」4号／和比古
「あむの木通信」149号、150号、151号、152号／福永祥子
「Oct.」7号／高谷和幸
「ア・テンポ」60号／玉井洋子
「RIVIERE」177号、178号、179号、180号／永井ますみ
「時刻表」10号／たかとう匡子
「別嬢」114号／高橋夏男
「多島海」40号／江口節
「風の音」22号／野口幸雄
「月刊めらんじゅ」163号、164号、165号、166号、167号、168号／大橋愛由等
「鶺鴒」16号／江口節
「プラタナス」68号／玉川侑香

〈2021年12月〜2022年5月〉

「月刊めらんじゅ」169号／大橋愛由等
「月刊MAROAD」170号、171号、172号、173号、174号／大橋愛由等
「RIVIERE」180号、181号、182号／永井ますみ
「現代詩神戸」275号、276号／永井ますみ
「ガーネット」96号／高階杞一・神尾和寿

「ターミナル」16号／神田さよ
「別嬢」115号／高橋夏男
「現代詩神戸」275号、276号／三宅武
「Contralto」45号／坂東里美
「EDGING」51号／寺田操
「時刻表」終刊号／たかとう匡子
「鶺鴒」17号／江口節
「汽水湖」4号／福永祥子
「ア・テンポ」61号／玉井洋子
「多島海」41号／江口節
「遥」5号／和比古
「あむの木通信」155号、156号、157号、158号／福永祥子

〈2022年6月〜2022年10月〉

「RIVIERE」183号、184号／永井ますみ
「現代詩神戸」277号、278号／永井ますみ
「月刊MAROAD」175号、176号、177号、178号／大橋愛由等
「ア・テンポ」62号／玉井洋子
「河口から」Ⅷ／季村敏夫個人詩
「ガーネット」97号／高階杞一・神尾和寿
「Messier」59号／香山雅代
「プラタナス」70号／神戸詩人会議・玉川侑香
「鶺鴒」18号／江口節
「あむの木通信」160号、161号、162号、163号／福永祥子
「多島海」42号／江口節
「EDGING」52号、53号／寺田操
「Contralto」46号／坂東里美
「ターミナル」17号／神田さよ

編集メモ

いまだ続く新型コロナウィルスの伝染状態。兵庫県民の五人に一人が感染しており、まだまだ油断を許さない現況です。一日も早い収束を願い、かつての日常に戻ることを願うばかりです。欧米ではすでにマスクなしの日常生活となっているようですが、日本という国民性を考えるとあとしばらくはマスク着用の日々がつづくものと予想されます。

２０２２年は兵庫県現代詩協会が設立されて25年の節目となりました。この四半世紀を振り返りますと、協会にかかわる多くの詩人たちが、豊潤な詩語と卓越した表現に満たされた作品を積み重ね、詩という文学に真摯に向き合った文学的営為を確認できます。

16巻目となる本書『ひょうご現代詩集２０２２』の編集作業をしております最中に、本協会の初代会長であった安水稔和氏が８月16日に逝去されたとの訃報に接しました。設立当初の会員が鬼籍に入る一方で、あらたに入会した会員の作品も本詩集に掲載されるなど、すこしずつ構成員が変化しながらこの『ひょうご現代詩集』は巻数を重ねています。

いまや戦後という長い「戦間期」が終息して「戦前」という時代に突入したのかもしれません。詩は、時代の映し鏡であるとともに、時代・情況を越える表現のタブローでもあります。本詩集に寄せられた詩群を読んでいますと、詩人ならではの時代・情況を撃つ作品をはじめとして、徹底して自己や自己の周辺をみつめる作品もあるなど、その表現の多様さに驚くばかりです。この多様さこそ、本書の編集を担当した者の悦びとするものです。

最後に、本書の制作にあたって、カバーと扉ページに掲載した作品を提供していただいた増田まさみさん、校正作業に協力していただいた会員有志のみなさんに、この場をかりて厚くお礼申し上げます。

（編集担当・大橋愛由等）

ひょうご現代詩集2022（通巻16集）

発　　行　2023年3月20日

発 行 人　時里 二郎

編集・発行　兵庫県現代詩協会
〒651-0091 神戸市中央区若菜通6-4-15-203
山本 真弓（兵庫県現代詩協会事務局）

ホームページ　http://hyogopoetstry.sakura.ne.jp/main

印 刷 所　澪 標 みおつくし
大阪市中央区内平野町2-3-11-202
ＴＥＬ 06-6944-0869
ＦＡＸ 06-6944-0600